

「循環」再ハッケン!

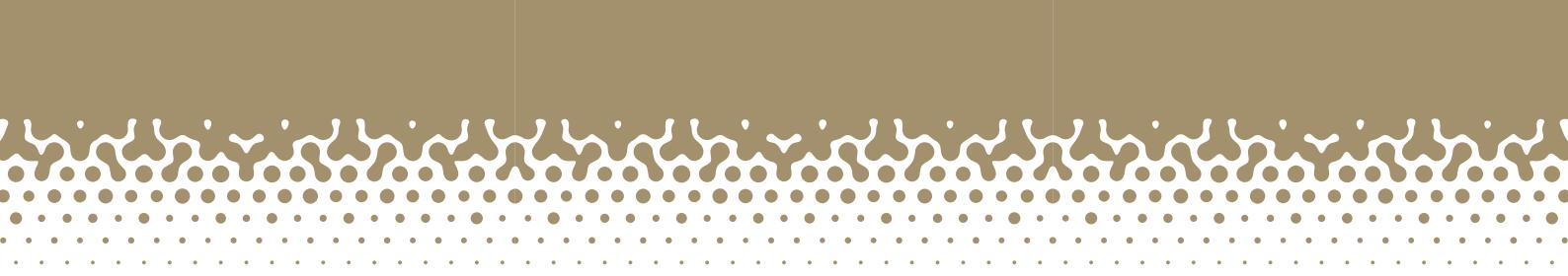
月刊日本館

Issue

01

特集 | Feature

いのちと、
いのちの、
あいだに



Everything Across the Universe Is Connected, Even Our Lives.

「循環」と言われてもピンとこないけれど。
それは今、あなたの体でも私の体でも起こっていて。
それは地球の仕組みでもあって。
生産、消費、分解を繰り返す「循環」の物語は
世界そのものと言えるのかもしれない。

issue 01

Between Lives

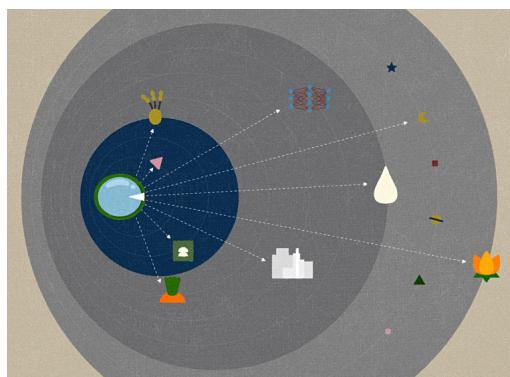
特集記事



マンガで読むいのちの「循環」 いのちの「循環」マンガを読む

地球を大きく見渡せば、「消費者」人間なんて生態系の中ではとても小さな存在。「生産者」植物、「分解者」菌類に生かされているってすごい真実だ。

P.04



私からXメートル。 ここにも「循環」。あそこにも「循環」！

循環を巡る旅は、私たちの体の中からはじまり、半径10mの家の中、地球、宇宙を超えてあの世まで続きます。果てしなき循環の旅へ、さあご一緒に。

P.50

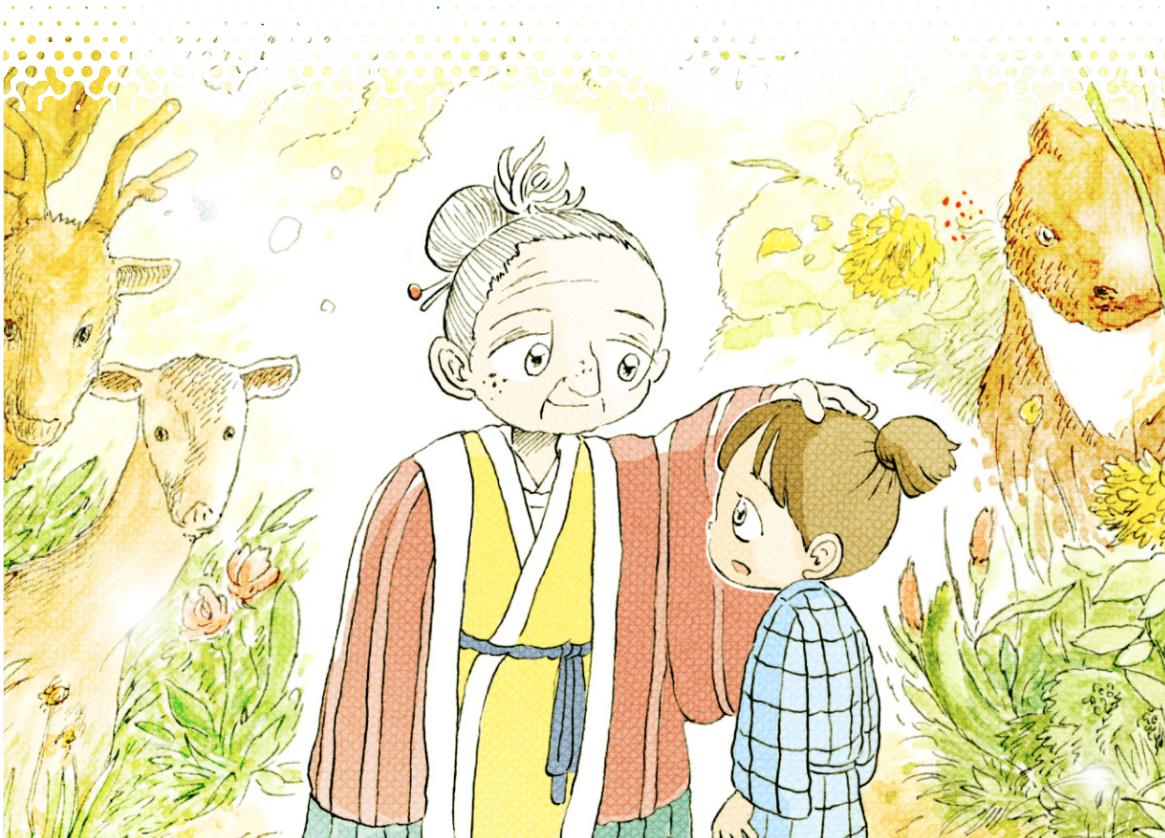


「循環」って、なんだろう? 10人のキーパーソンと考える

日常的によく耳にするけれど、意外にちゃんと考えたことがない「循環」という言葉。「思考を巡らせる」と言うけれど、まず自分も考えてみよう。

P.40

マンガで読むいのちの「循環」

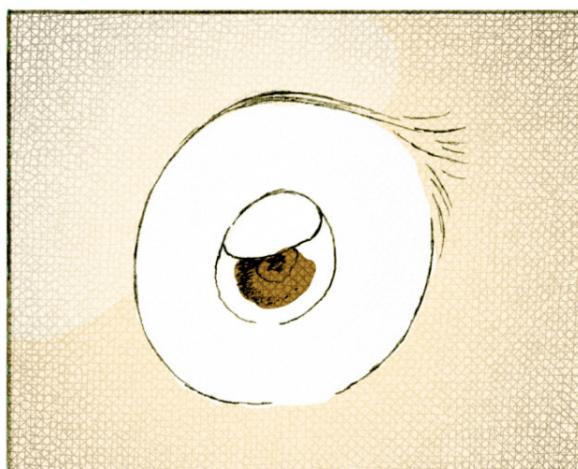


動物が植物を食し、死に、微生物がその死体を分解し、土に還す。このいのちの循環には3つの重要な役割が存在します。

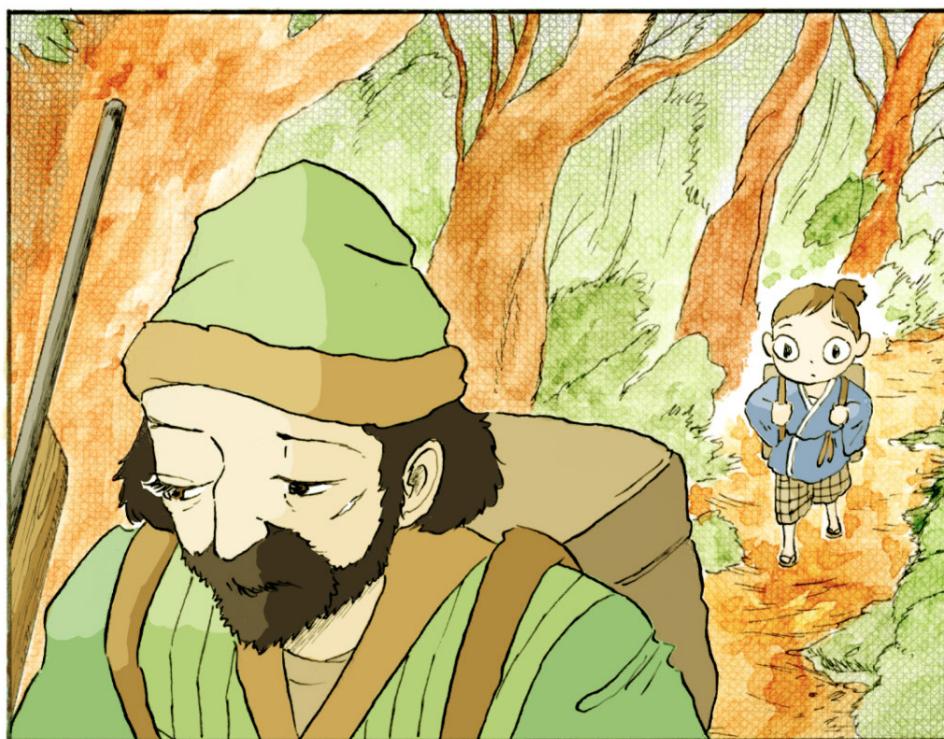
無機物から有機物をつくる植物は「生産者」、有機物を取り入れる動物は「消費者」、両者を分解する菌類などは「分解者」と呼ばれ、そのシステム全体を私たちは「生態系」と呼んでいます。地球全体を見渡せば、私たち「消費者」は生態系をなすとても小さな存在です。

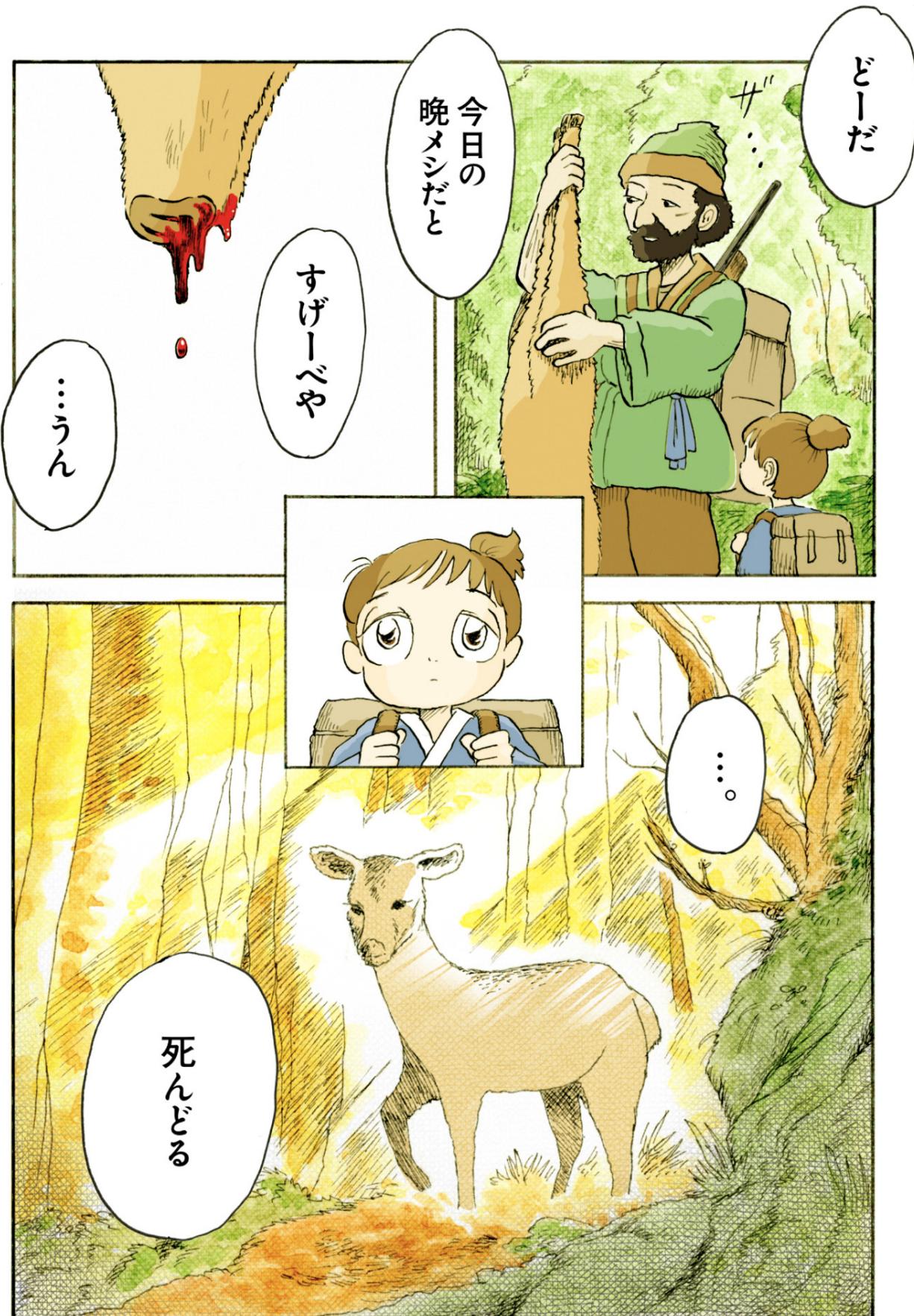
いのちはどこから来て、どこへ行くのか。

漫画家の佐々木充彦さんが描きます。

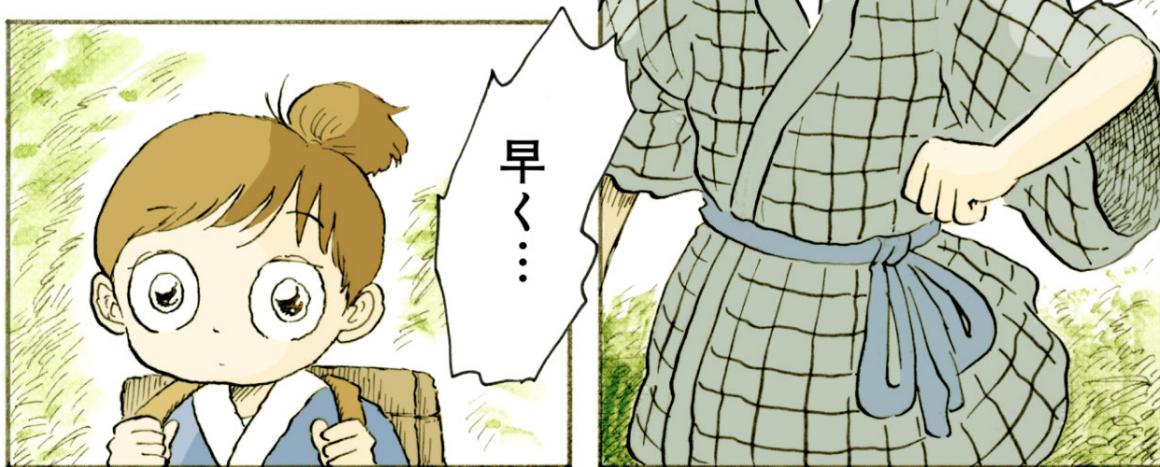
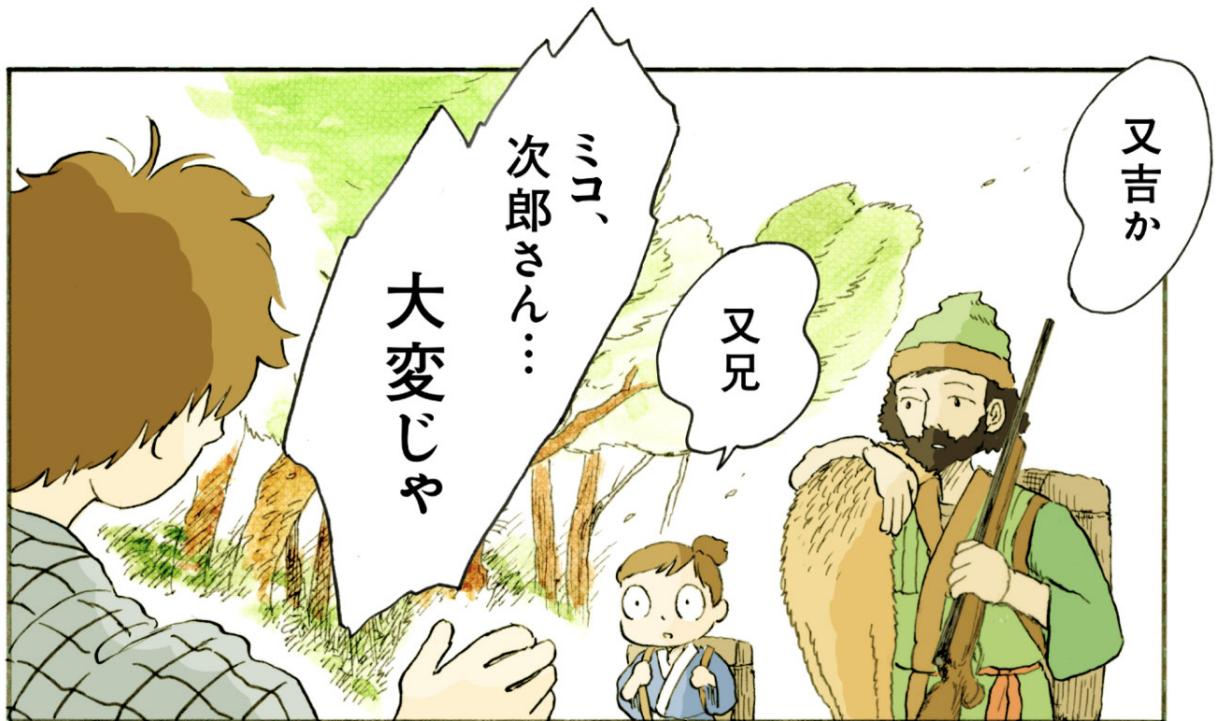


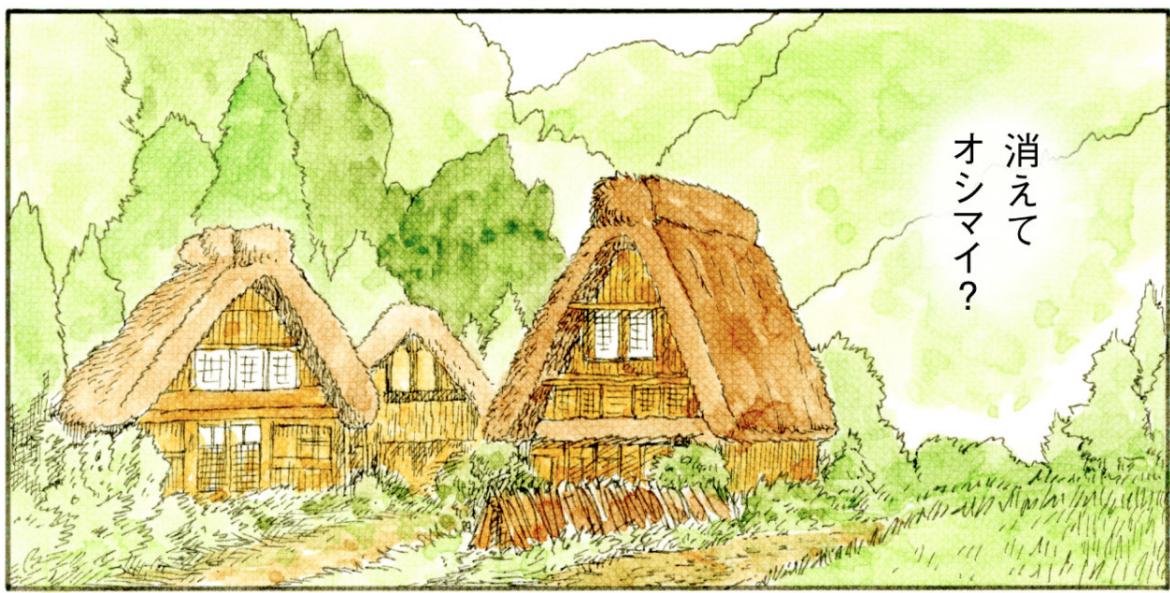






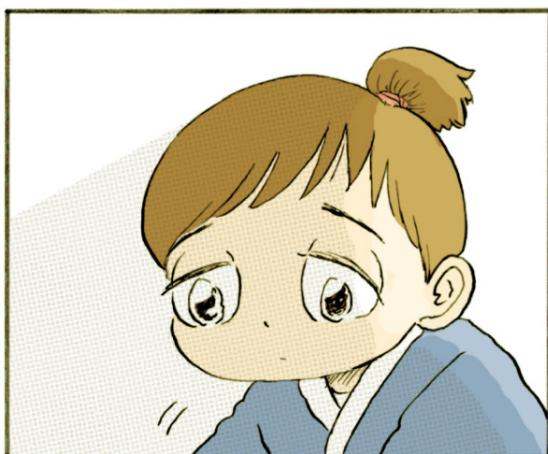


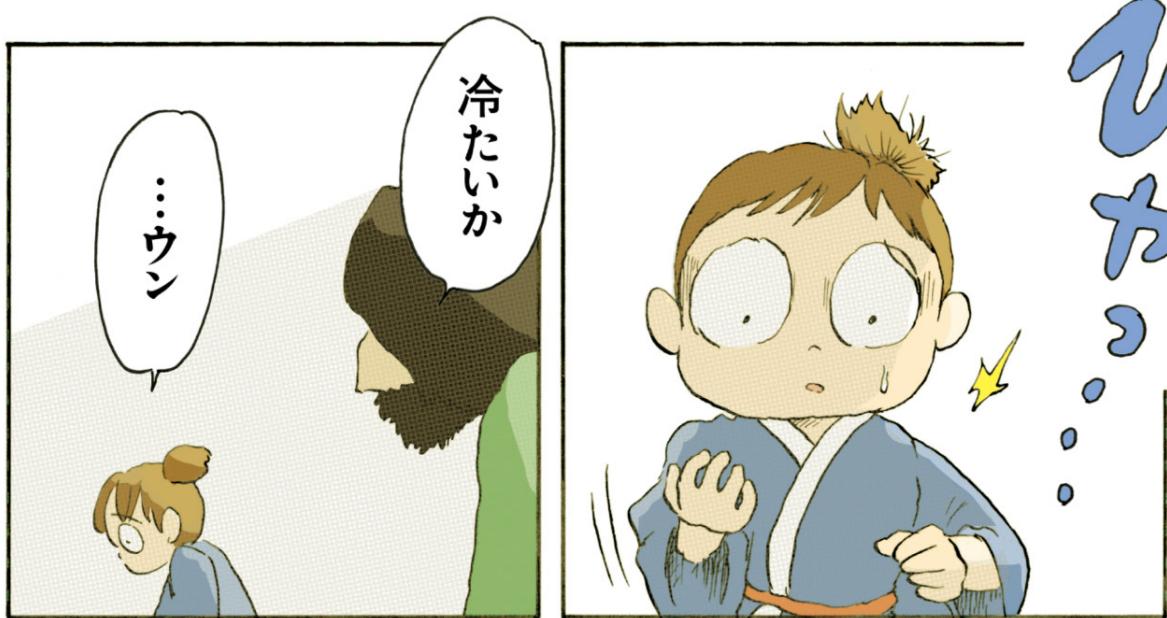




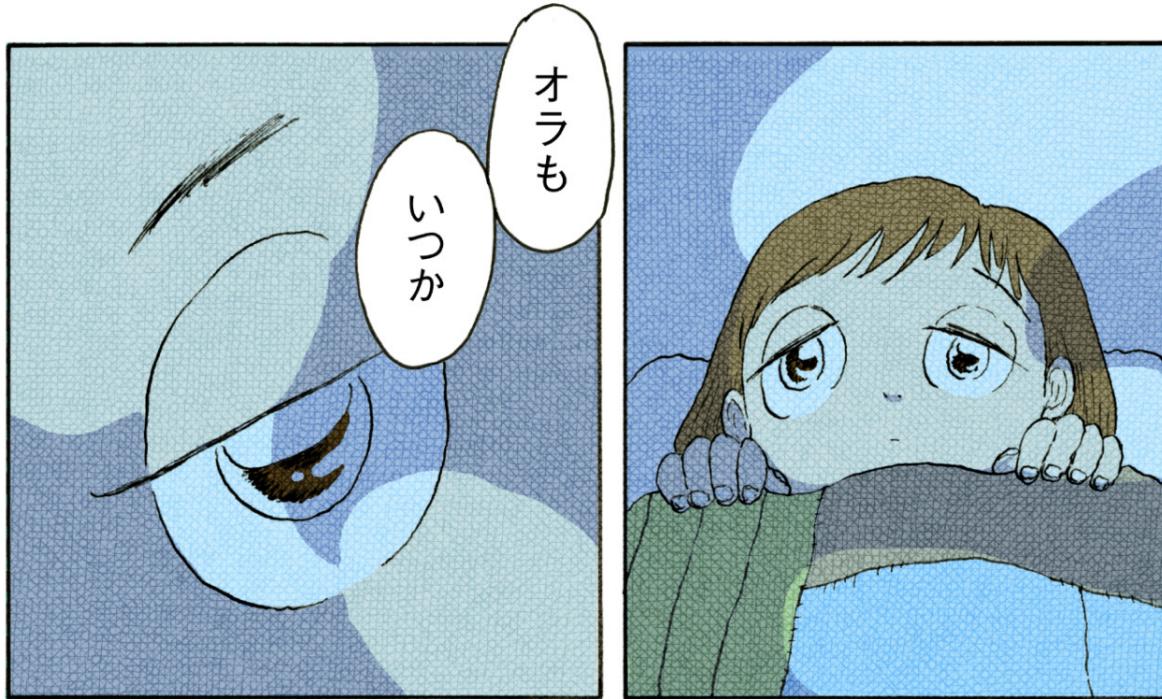
消えて
オシマイ?

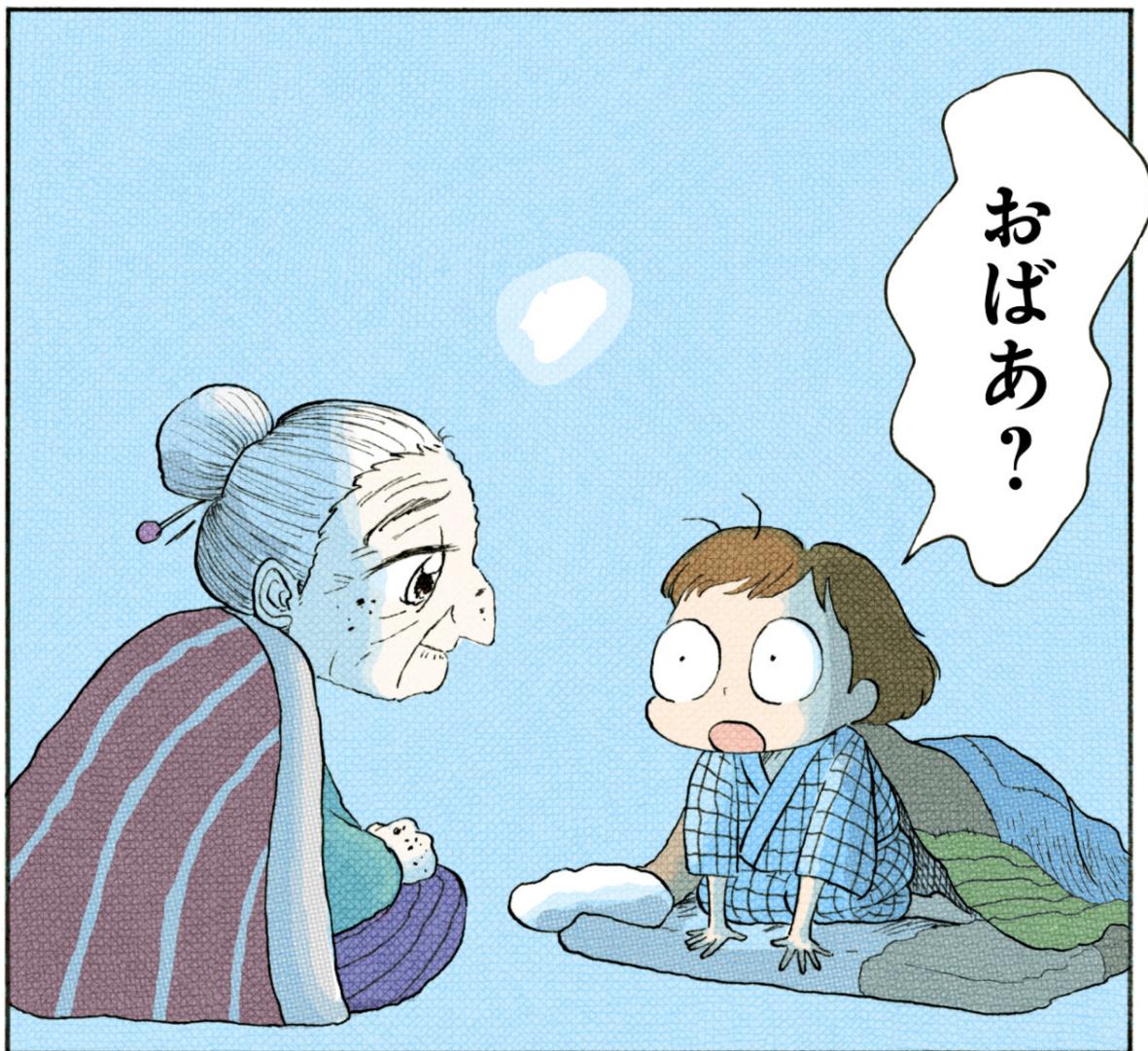


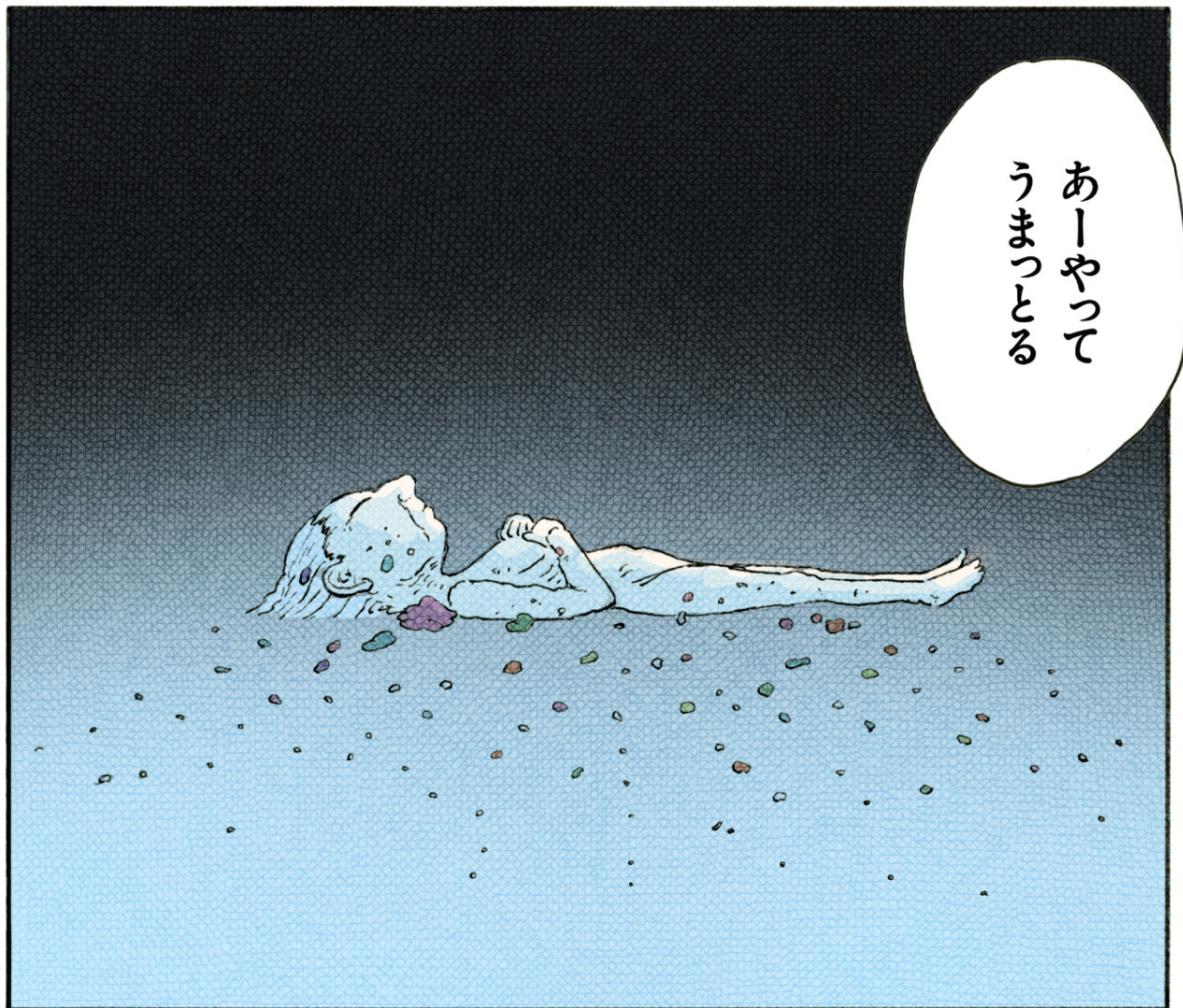
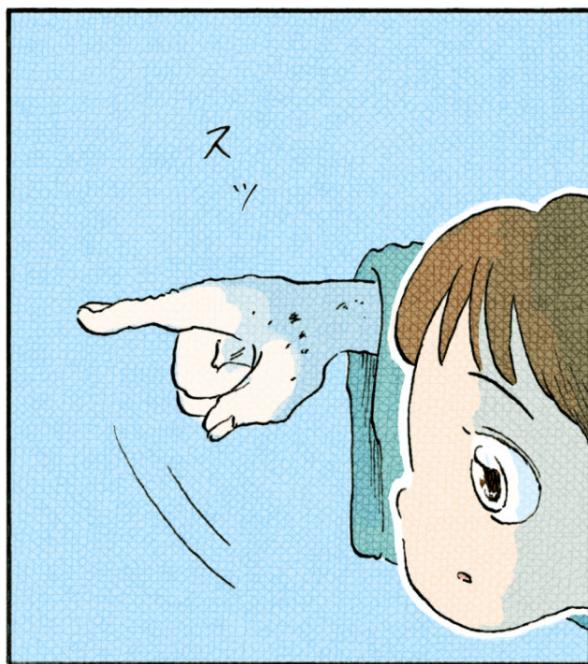


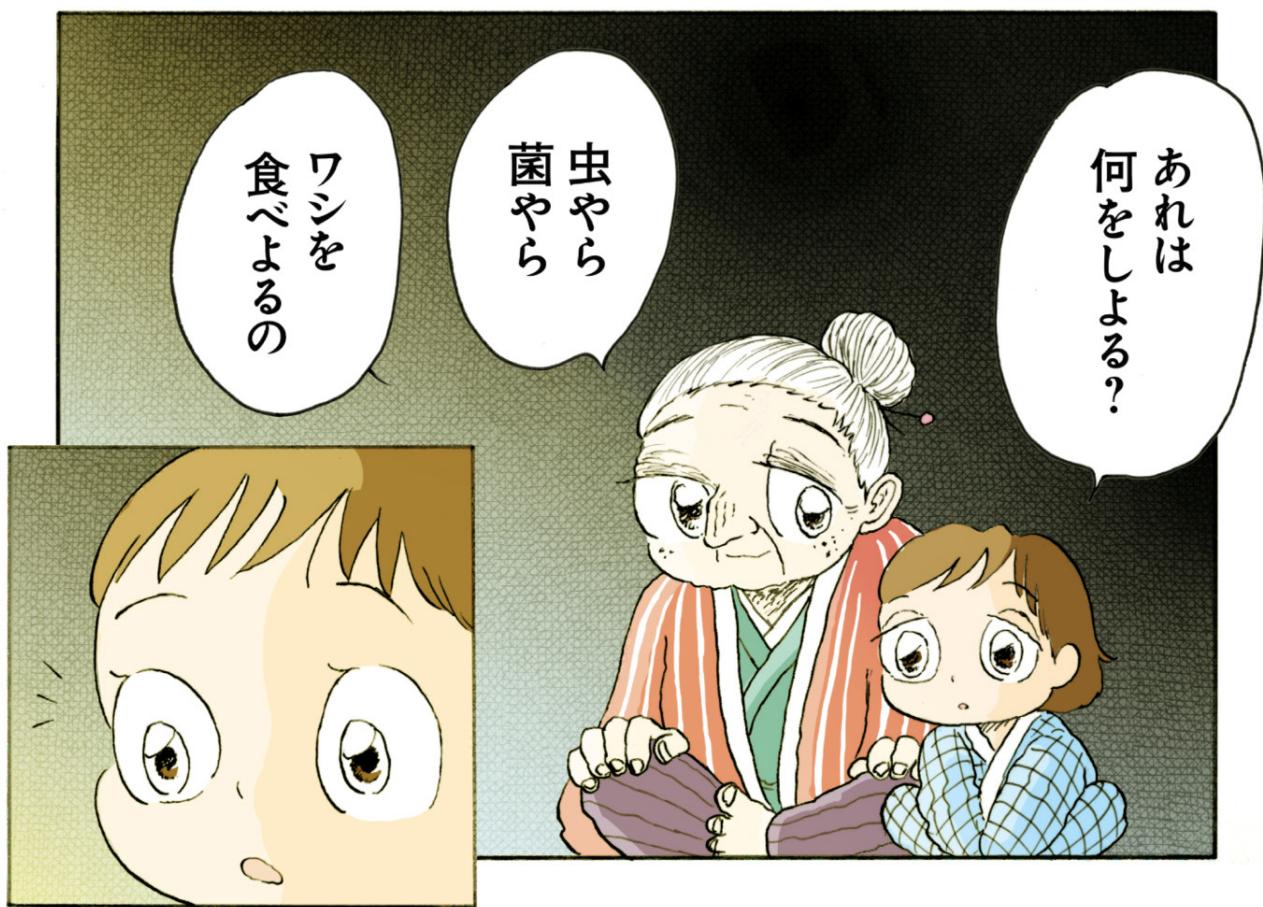
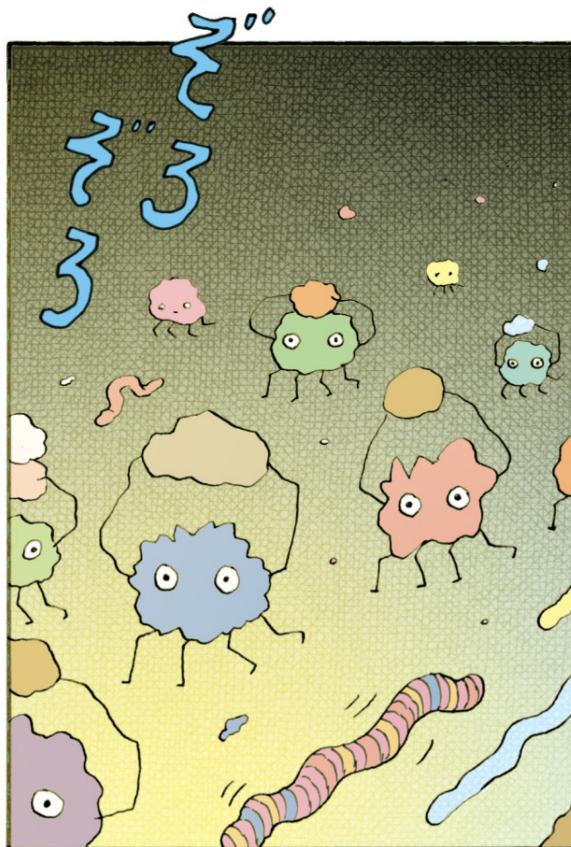


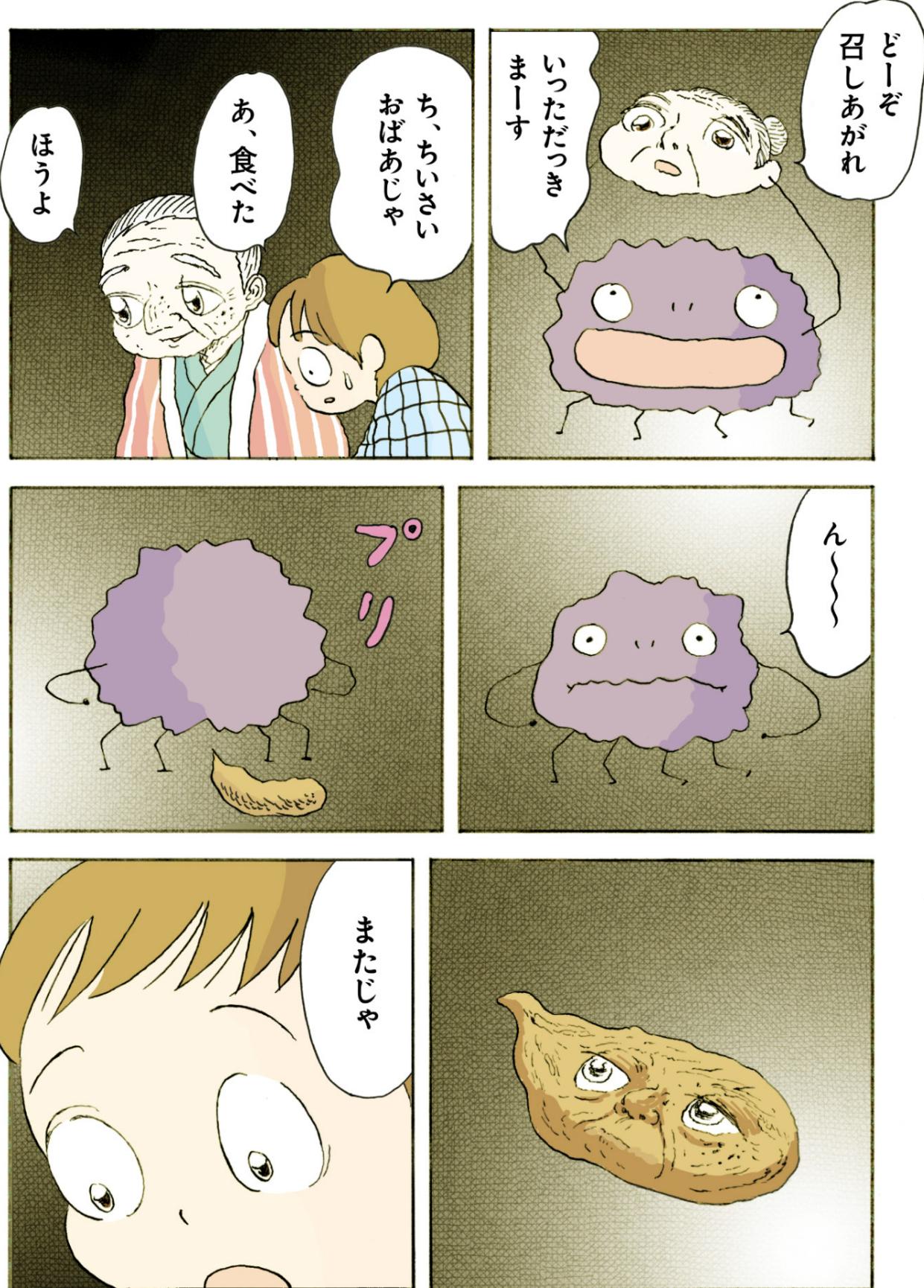


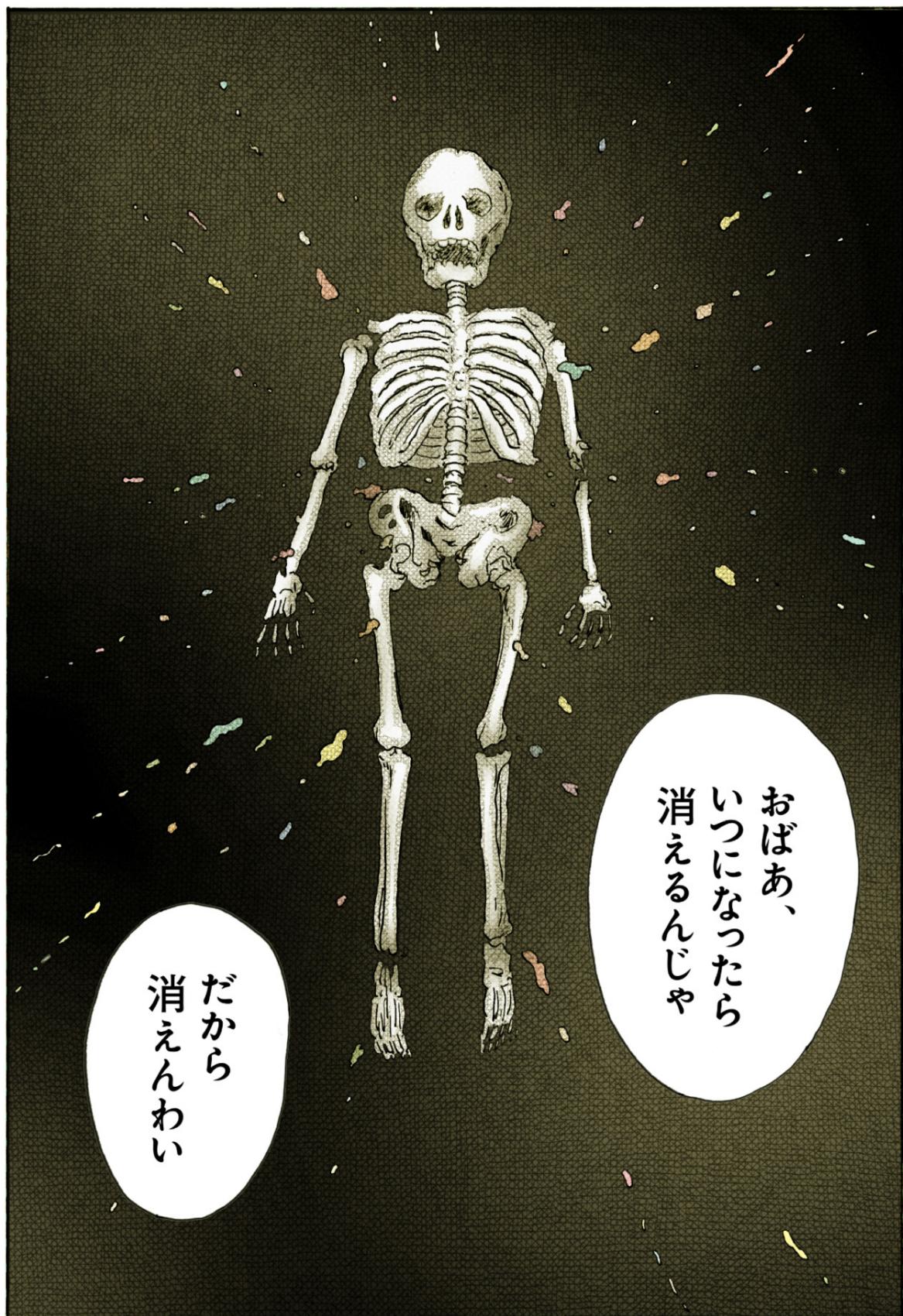






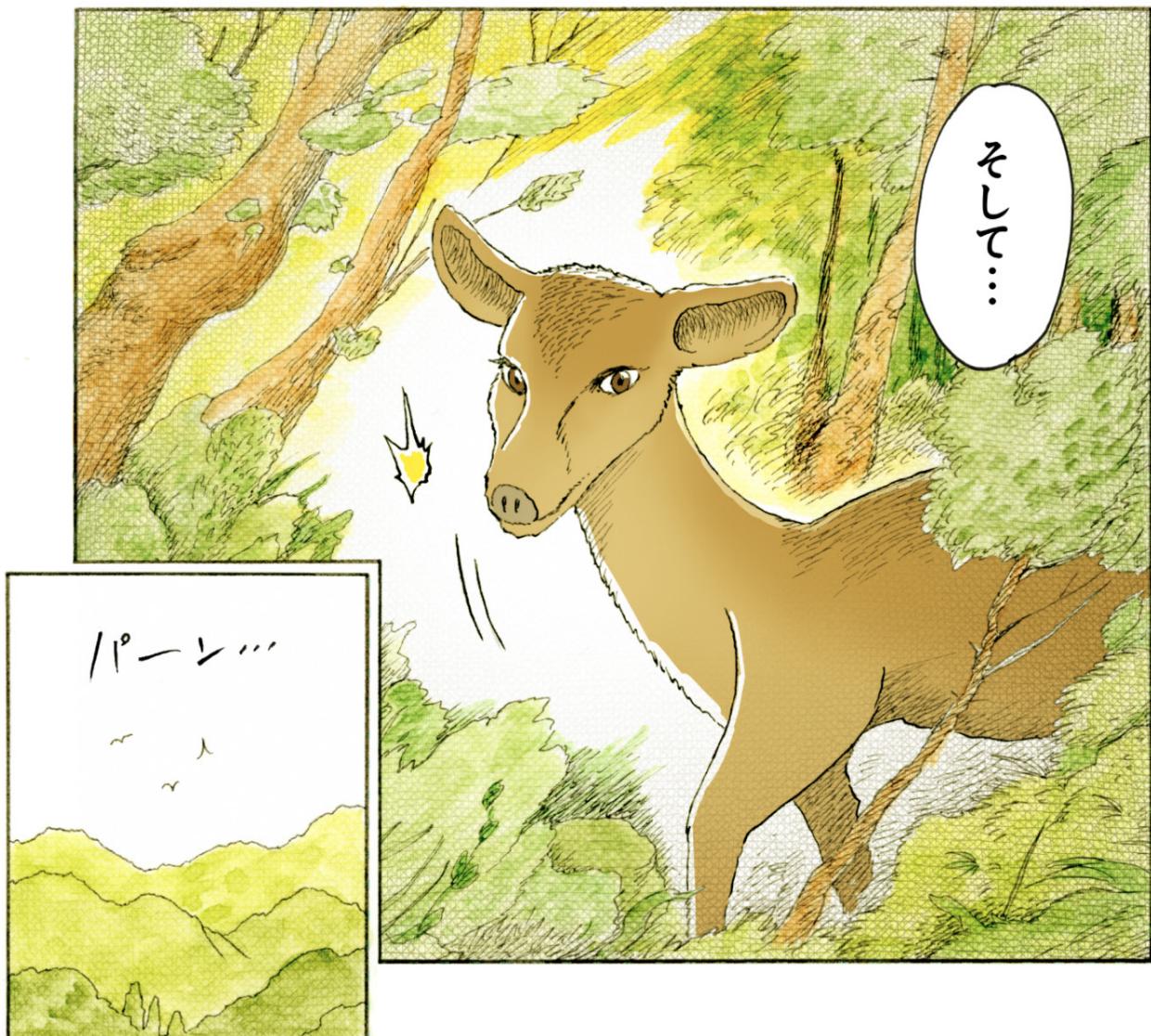
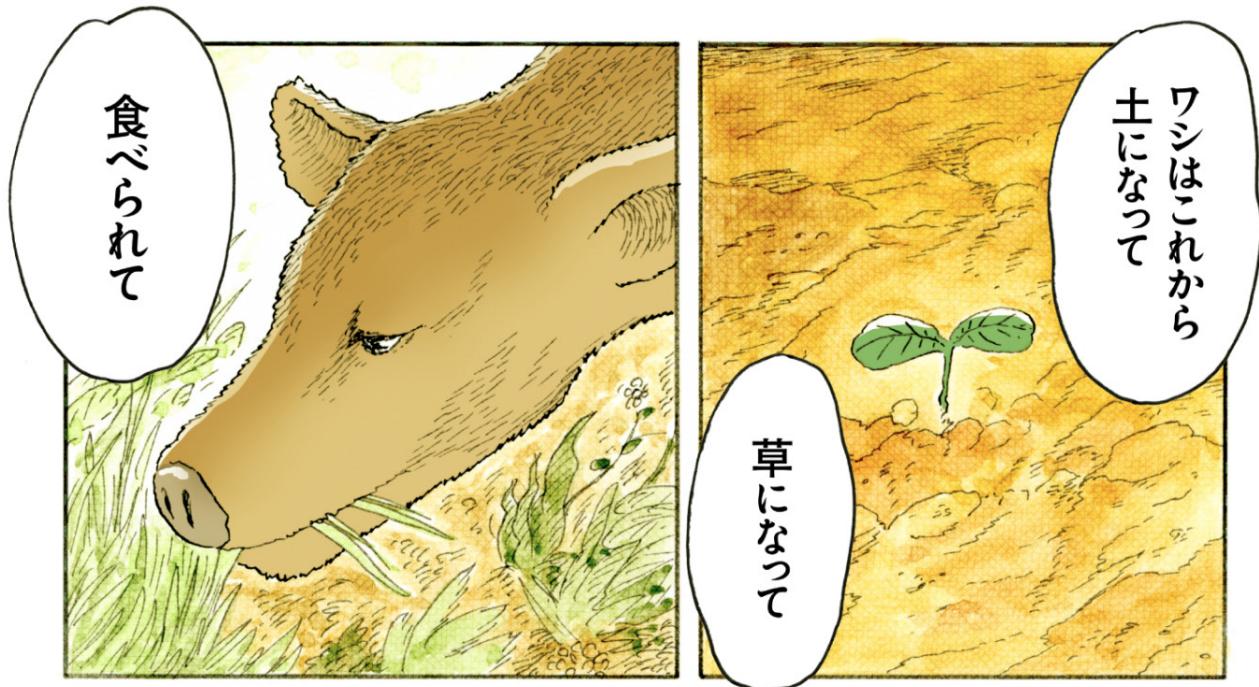


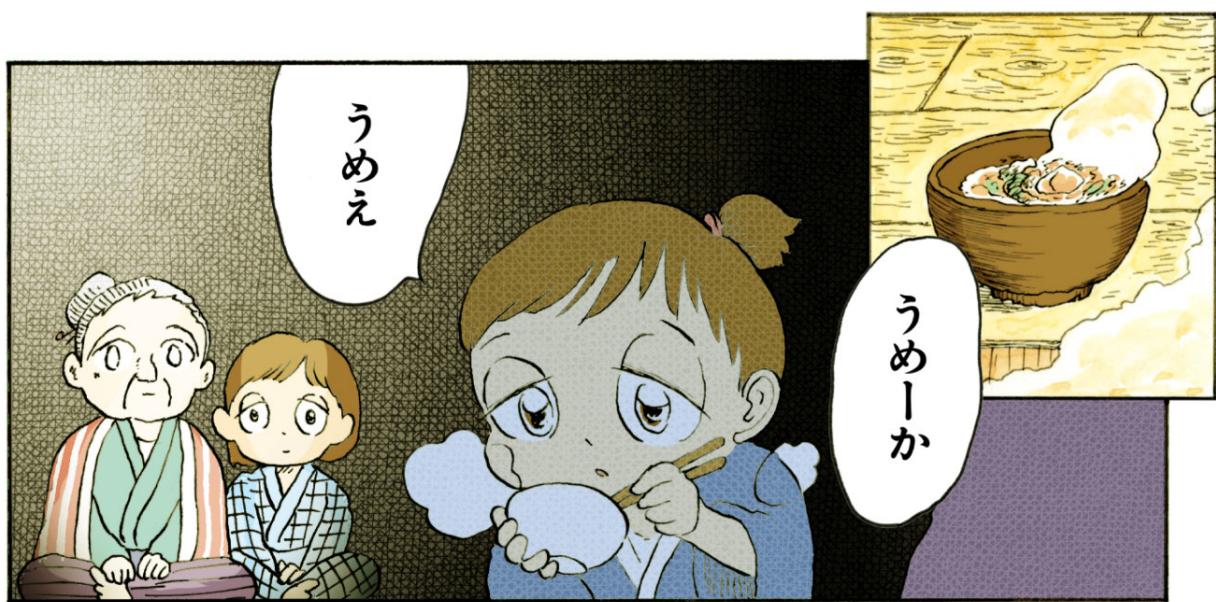


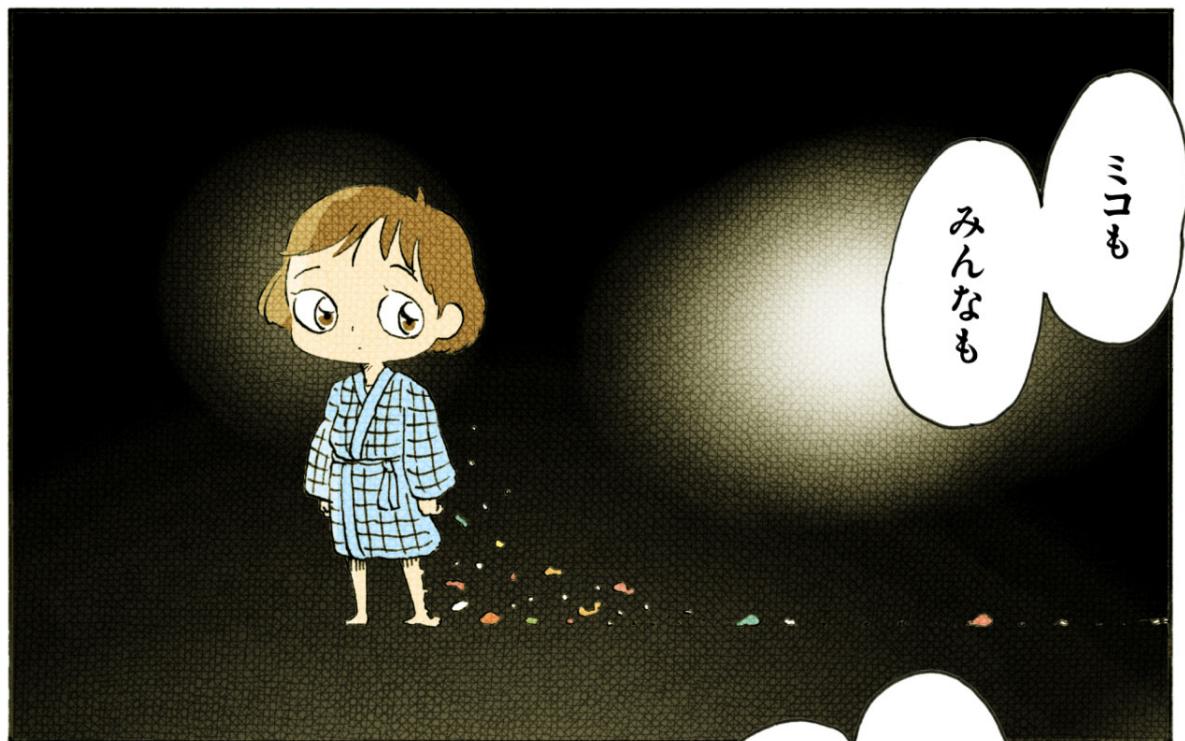


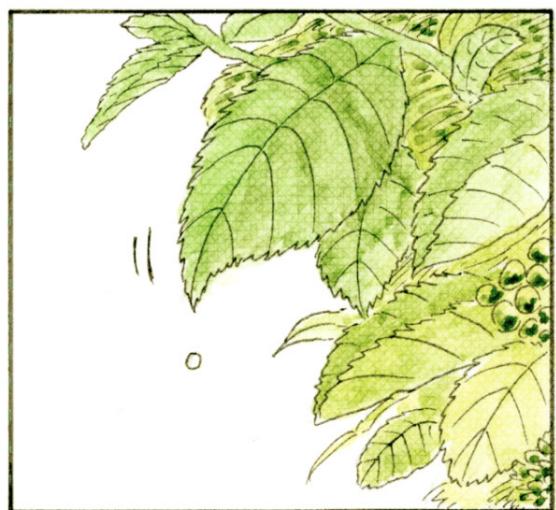
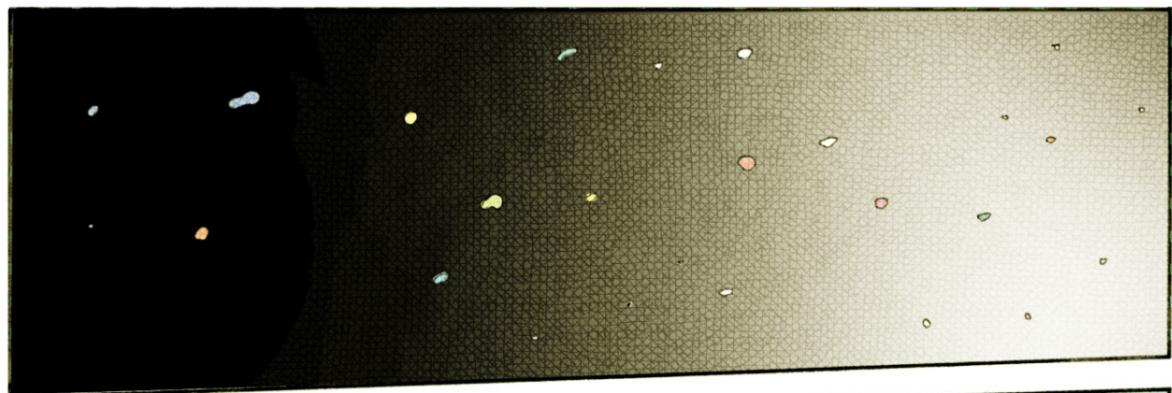
おばあ、
いつになつたら
消えるんじや

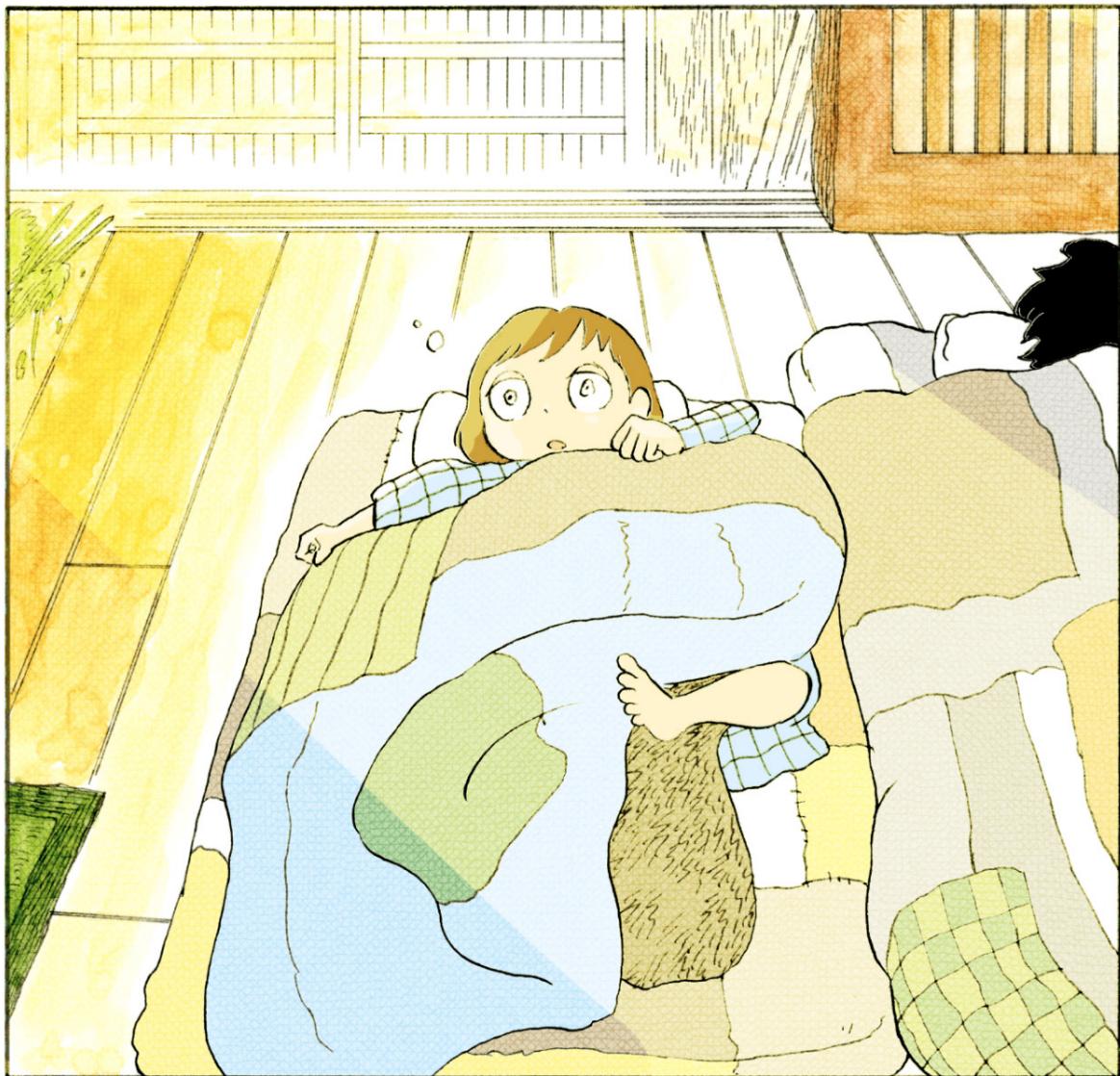
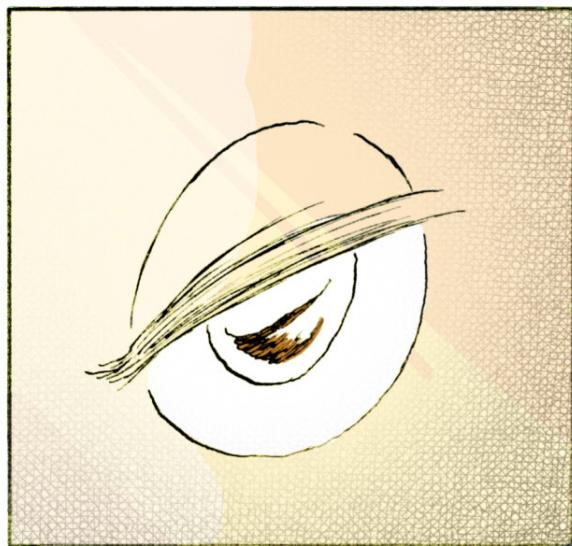
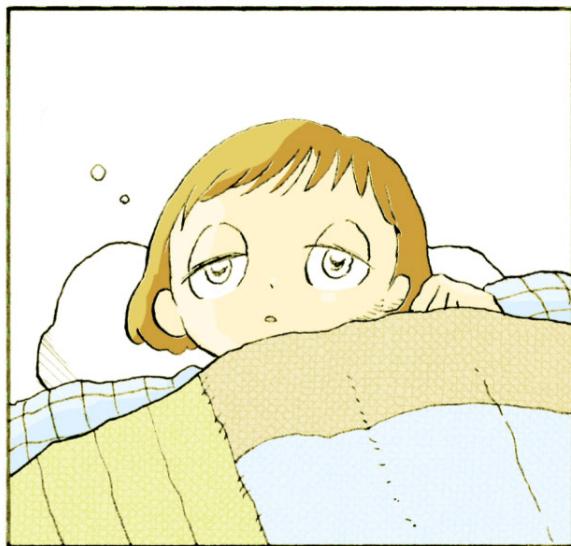
だから
消えんわい

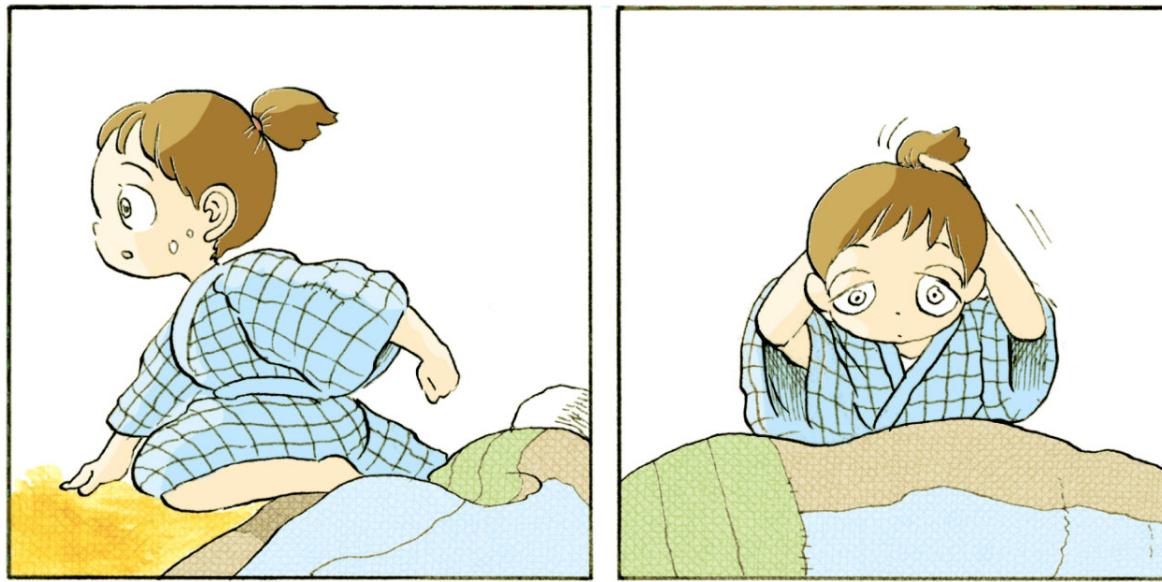


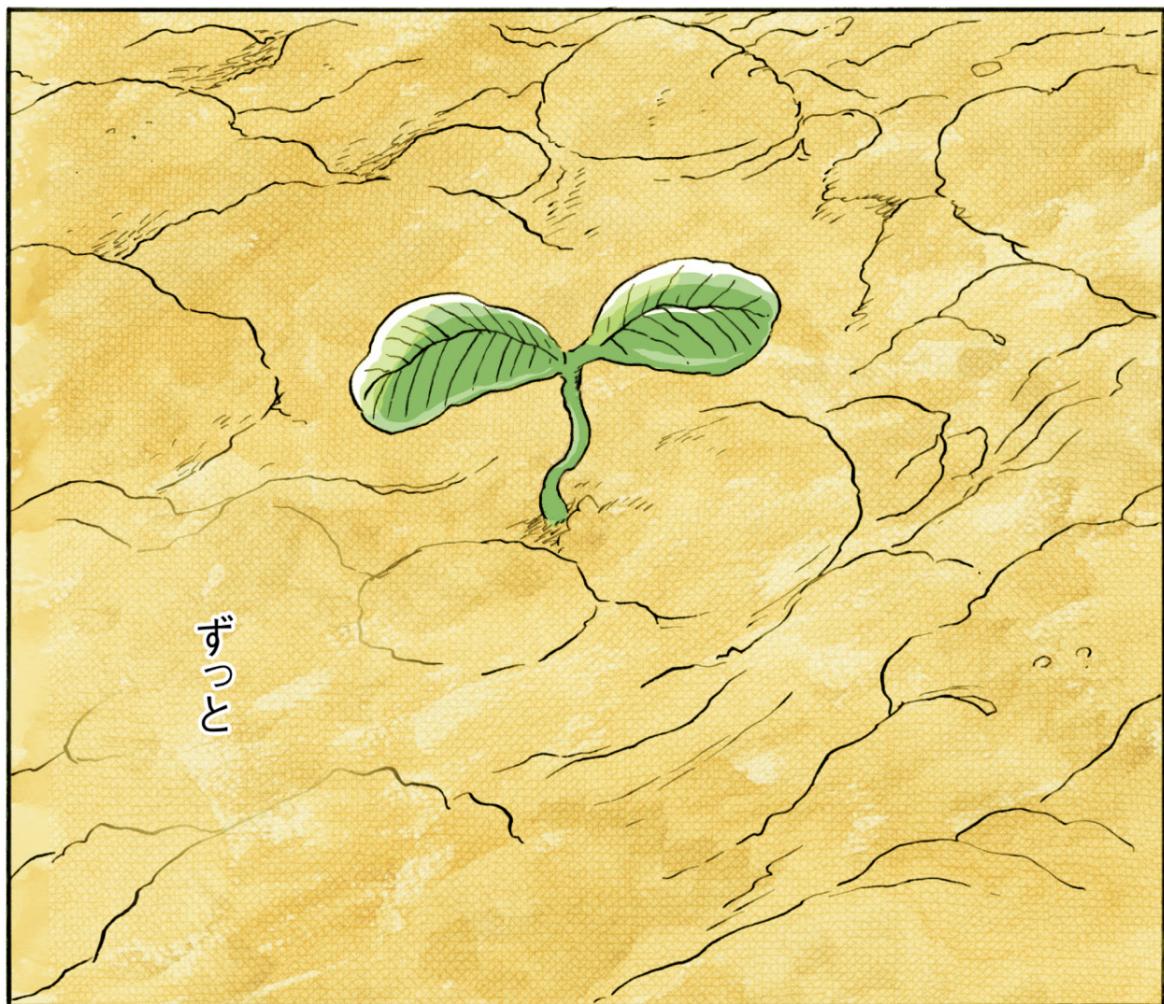
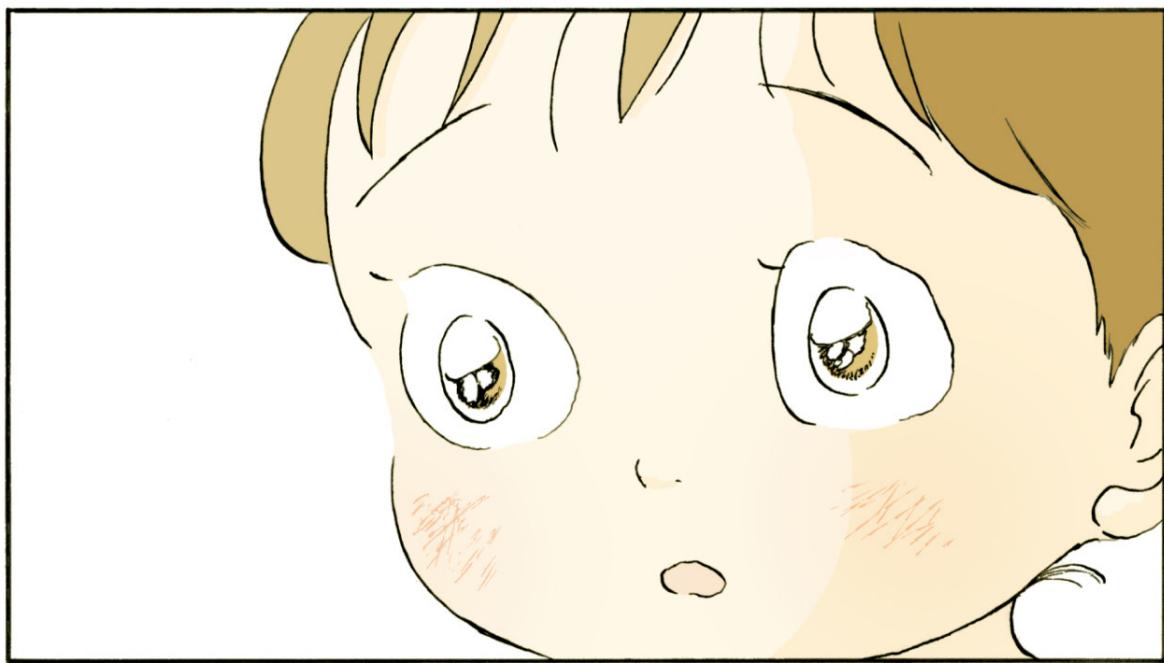












つながつと
るんやから





漫画家／イラストレーター

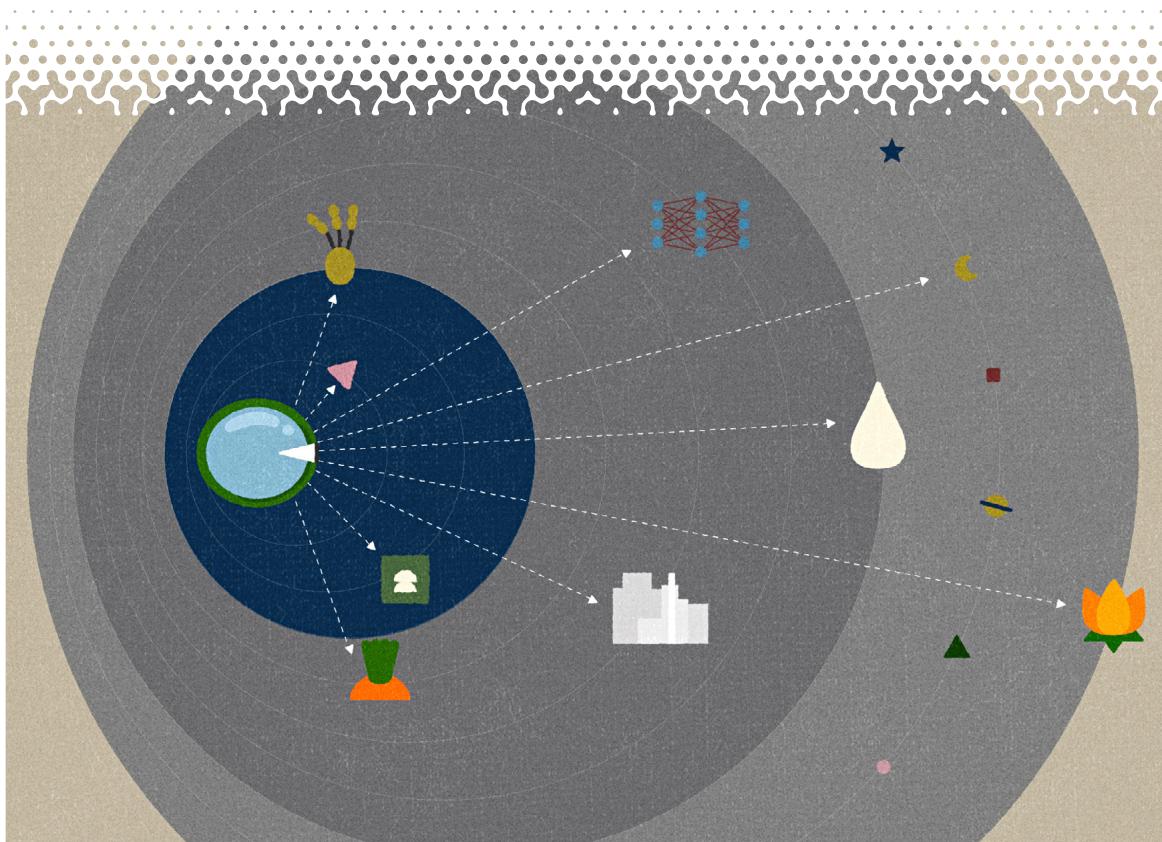
みつ ひこ

佐々木充彦

1983年1月26日生まれ。福岡県北九州市出身。『インターワール』(ピエブックス)が文化庁メディア芸術祭審査員推薦作品を受賞。イラストや装丁、MV用アニメなども手掛けている。

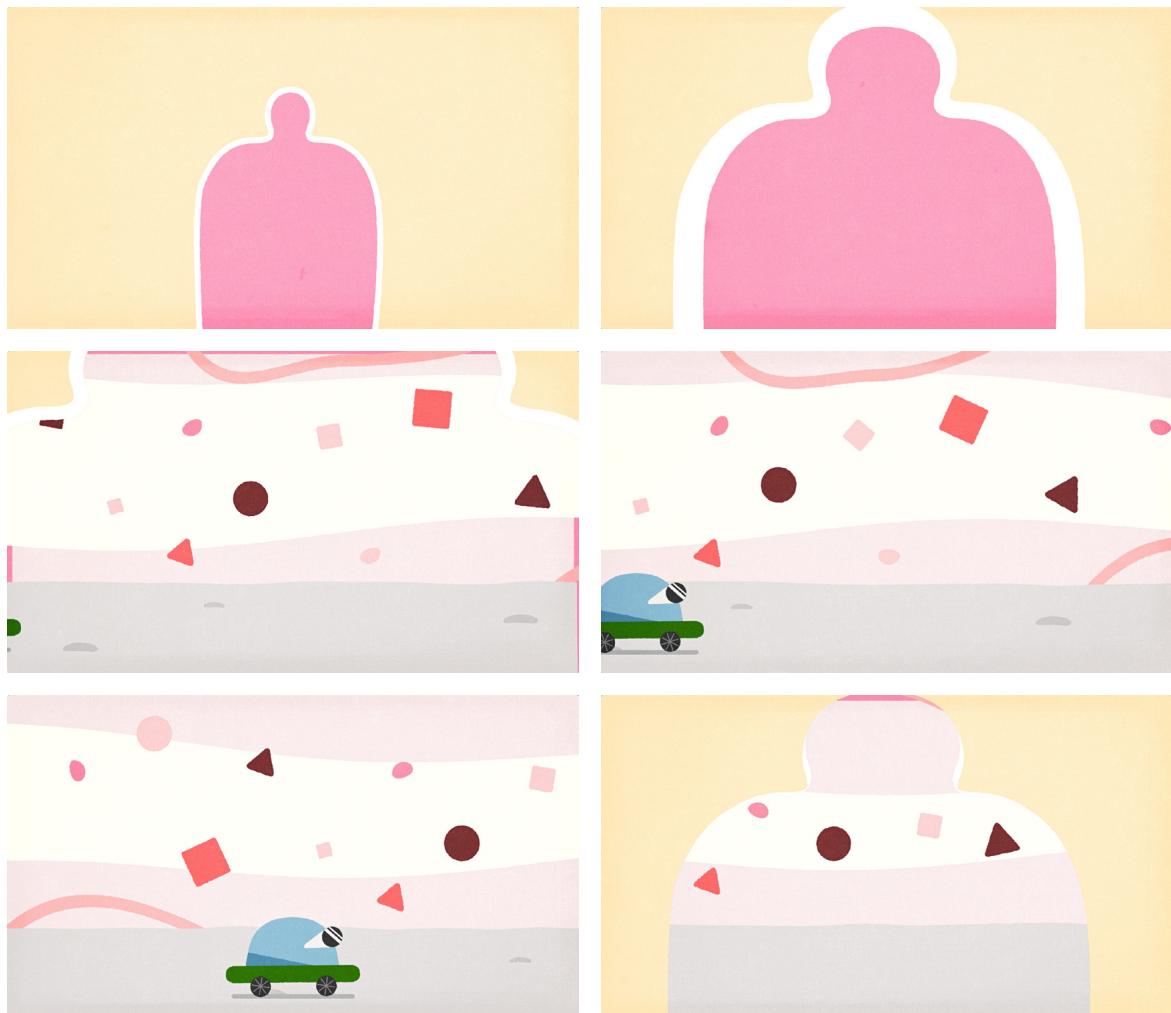


私からXメートル。 ここにも「循環」。あそこにも「循環」!



循環ってなんだろう。それはあなたの体の中にはあります。街に、山に、宇宙に、その向こうにもある。そう、私たちが日々生活する中で目にするあらゆるものは、実は様々な循環によって成り立っているのです。

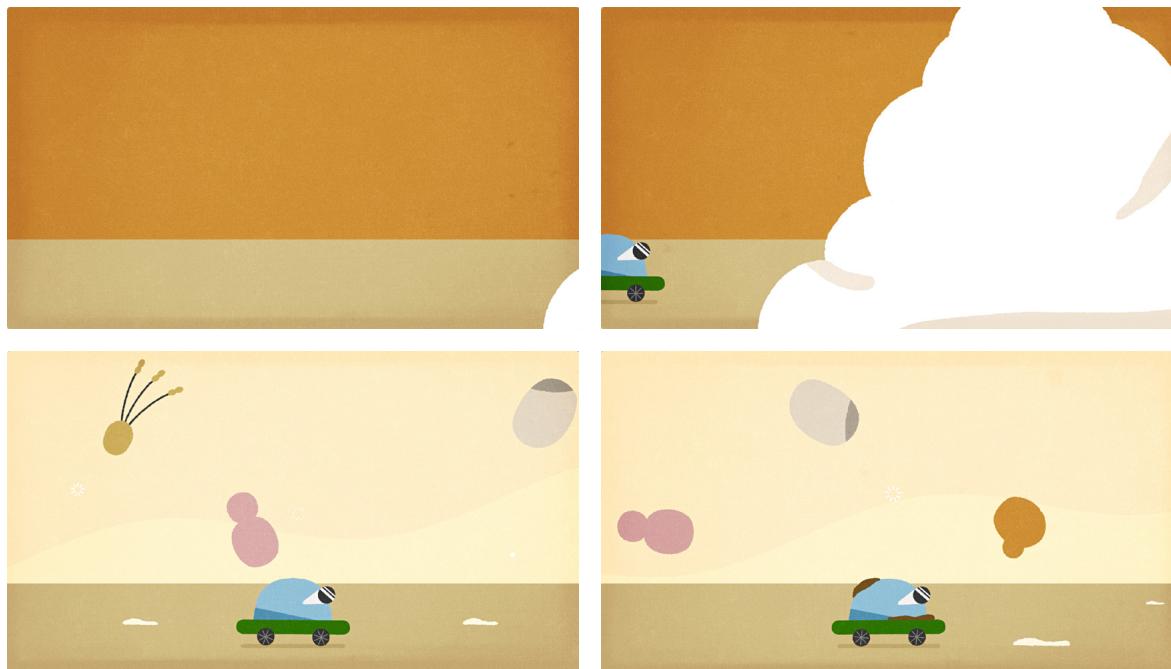
この世界の循環を巡る、Xmの旅は、私たちの身体の中、0mからスタートします。私が暮らす半径10mの家の中から、地球、宇宙を超えてあの世まで。果てしなき循環の旅へ、いざ！



体の中は、循環だらけ！

自分の中はある程度知っているつもりだけれど、自分の心臓が実際にどんな色をしているのか知らない。心臓はおよそ毎秒一回拍動して、身体中に血液を循環させている。心臓、動脈、静脈、毛細血管。血は体の中を巡って、酸素や栄養素を細胞に届け、二酸化炭素や老廃物を回収する。人の体は循環の仕組みを中心に設計されています。それは人間だけに限らず、生きとし生けるもの全てに言えること。

たとえば、生物学者・福岡伸一の名著『生物と無生物のあいだ』を読むと、「生物とは動的な平衡にある流れであり、けっして担保された個物としての実態ではない」とあります。身近かつ、壮大な循環の旅のはじまりです。



発酵、世界で一番小さな料理人たちの仕事

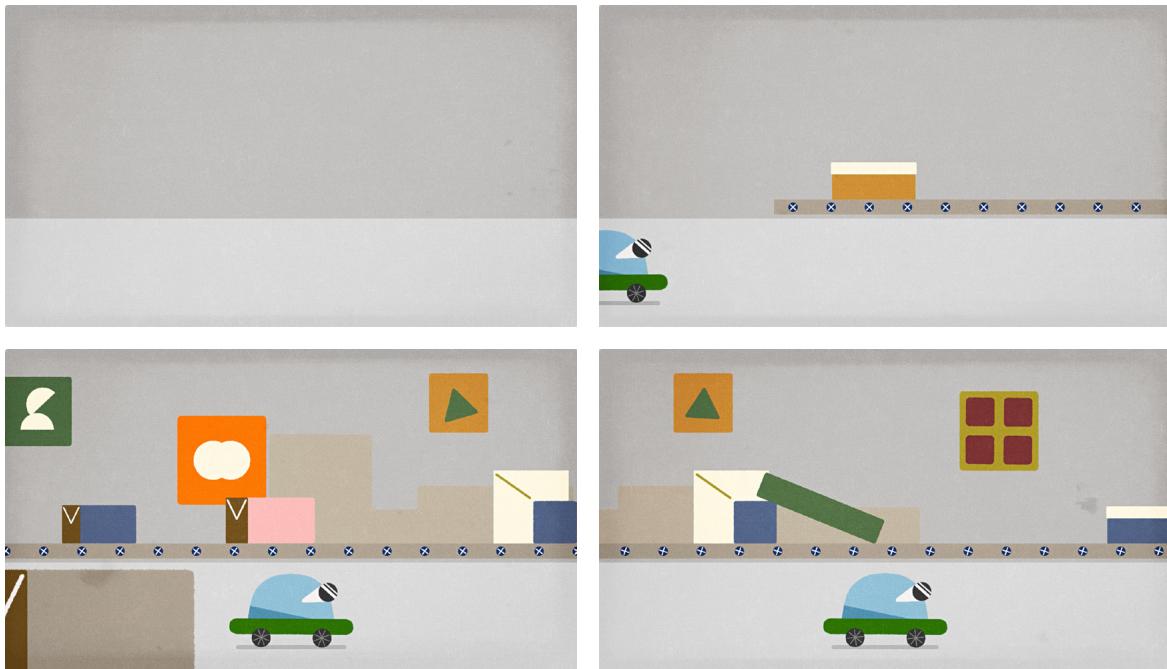
納豆、日本酒、醤油、ヨーグルトなど、私たちの食卓に欠かせないほど身近な発酵食品。その仕組みはどうなっているのでしょうか。

発酵とは、酵母や細菌、カビといった微生物がエネルギーを得るために炭水化物やたんぱく質などの有機化合物を分解し、アルコール類・有機酸類・二酸化炭素などを生成するプロセスのこと。食品の栄養価を高めたり、味わいを深めたり。発酵食品は、古来より身近な調理法として親しまれてきました。

私たちにとってプラスとなるものを「発酵」と呼んでいるけれど、実は、「腐敗」とメカニズムは同じ。微生物のはたらきによって、食べものが美味しくなったり、食べられなくなったりする。世界中で微生物の研究が進められているのだけれど、まだまだわからないことも多い。地球上に生息する微生物の数は推測によると 415×10^{30} 個なんて言われています。

確かなのは、発酵食品を食べることで、ミクロの世界で行われる微生物のはたらきの恩恵を受けるということと、そのおかげで、私たちの食が豊かになっているということです。

5m



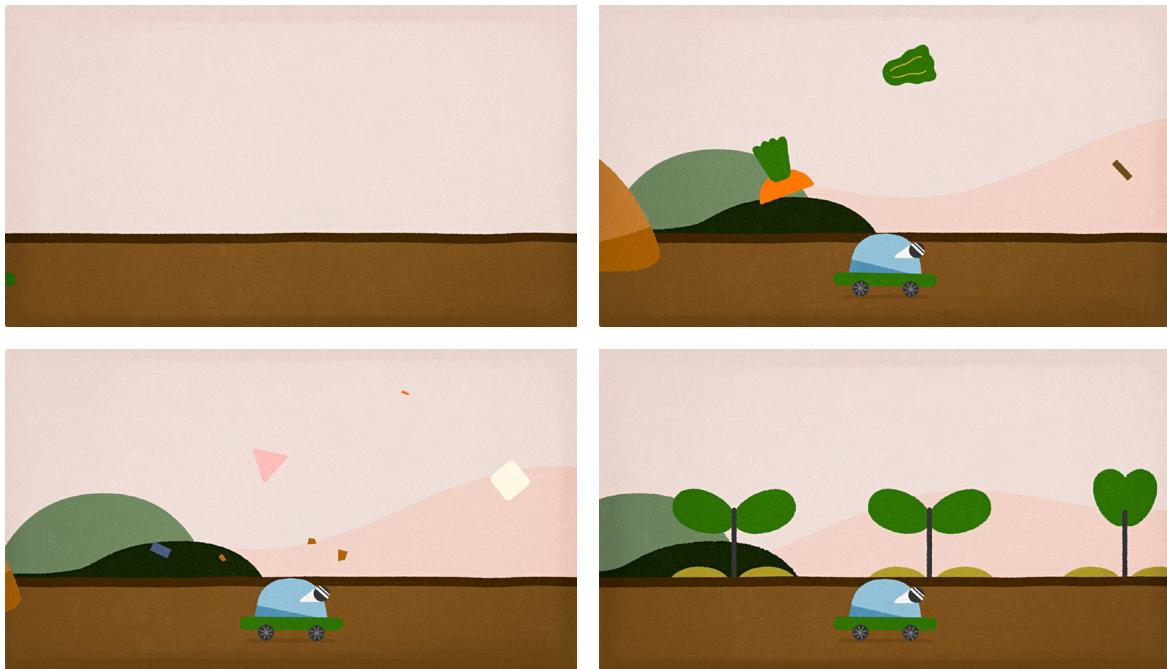
リセール市場が加速させる、ものの循環

長く愛用していたけれど不要になったものが、別の誰かに渡る。その誰かにとってそのものは新しい価値や機能を持つ。そういうものの循環は古くから行われてきました。たとえば江戸時代。わかりやすいのは、庶民から古着を買い取る「古着買い」。ろうそくの流れ買いという、溶けたろうそくを集める者も。「下肥買^{しもごえ}い」は、集めた排泄物を農家に肥料として売っていたそうで、上流階級の人の排泄物ほど栄養価が高く、高価だったのだとか（！）。

時は2024年。インターネットのリセール市場はいぜんとして急成長中。中でも国内において大きな影響力を持つプラットフォームといえば、昨年に創業以来の最高業績を記録したメルカリです。同社は創業10周年を機に「あらゆる価値を循環させ、あらゆる人の可能性を広げる」という新しいミッションを打ち出しました。

ものが循環していくことで、世界の組成はどんどん入れ替わり、経済が活性化され、個人の暮らしが変わってゆく。半径5m、自分の部屋の中にあるものからはじめる二次流通の世界で、循環のダイナミズムが体感できることでしょう。

50m



ビルの屋上からはじまる、「農業」の循環

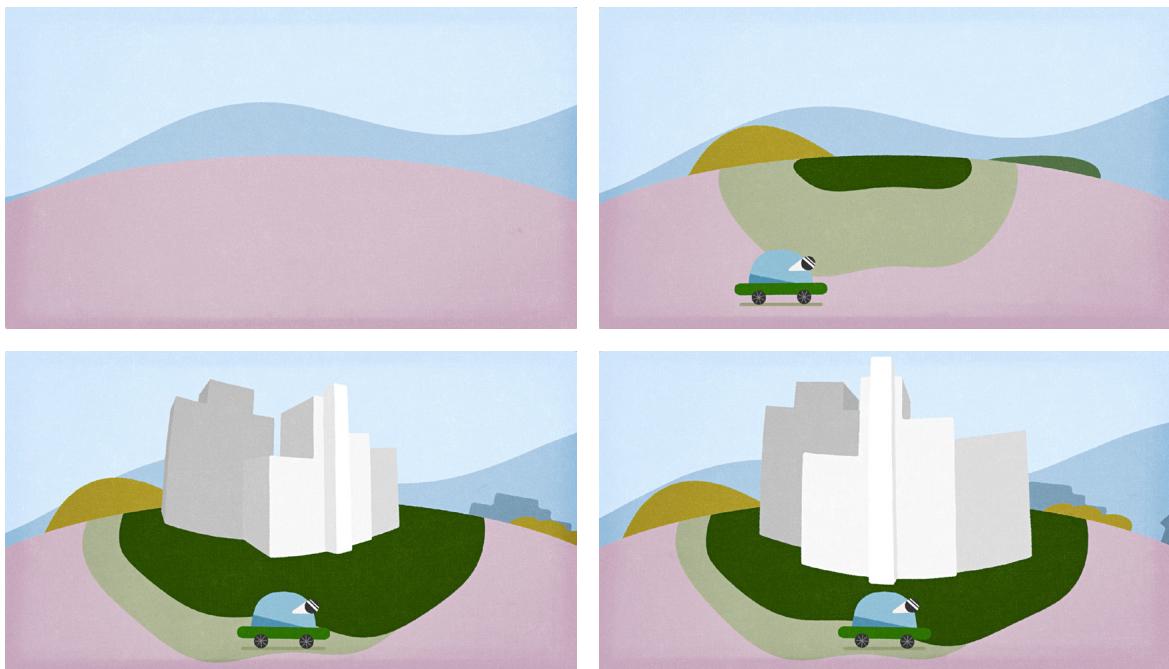
近年「コミュニティガーデン」と呼ばれる地域拠点をつくる動きが活発化しています。地域住民交流の促進、食文化の充実、環境課題の解決などを目的に、持続可能な地域づくりの拠点として世界中の都市部でコミュニティガーデンが続々と誕生しているのです。

特に「食」の問題に取り組む施設が数多くみられ、その潮流は日本でも感じることができます。コンポストを用いて生ゴミから堆肥を生み出し、日本橋茅場町を「食べられる街」にするというコンセプトのもとスタートしたのが「Edible KAYABAEN」というプロジェクト。東京証券会館の屋上に生まれたガーデンの設計は、人と自然が共存する社会をつくるためのデザイン手法「パーマカルチャーの父」と呼ばれるビル・モリソンから指導を受け、日本でパーマカルチャーの研究と実践を重ねるフィル・キャッシュマンが行いました。

「Edible KAYABAEN」を企画・運営する一般社団法人工エディブル・スクールヤード・ジャパンは、カリフォルニアのオーガニックムーブメントと食教育をつなげることに一役かった「エディブル・スクールヤード」と呼ばれるプログラムを展開し、公立小学校と協働しながら「食育-エディブル授業」を行っています。

屋上菜園で食材を育て、自ら調理し、みなで食卓を囲む。「Edible KAYABAEN」では、「食べる」を学びの軸に子どもたちの生きる力を育み、根付かせることによって健康で安心な暮らしができる地域づくりを行っていくそうです。ビルの屋上につくられた小さな庭から、未来につながる食の循環が生まれていくのです。

5,000m



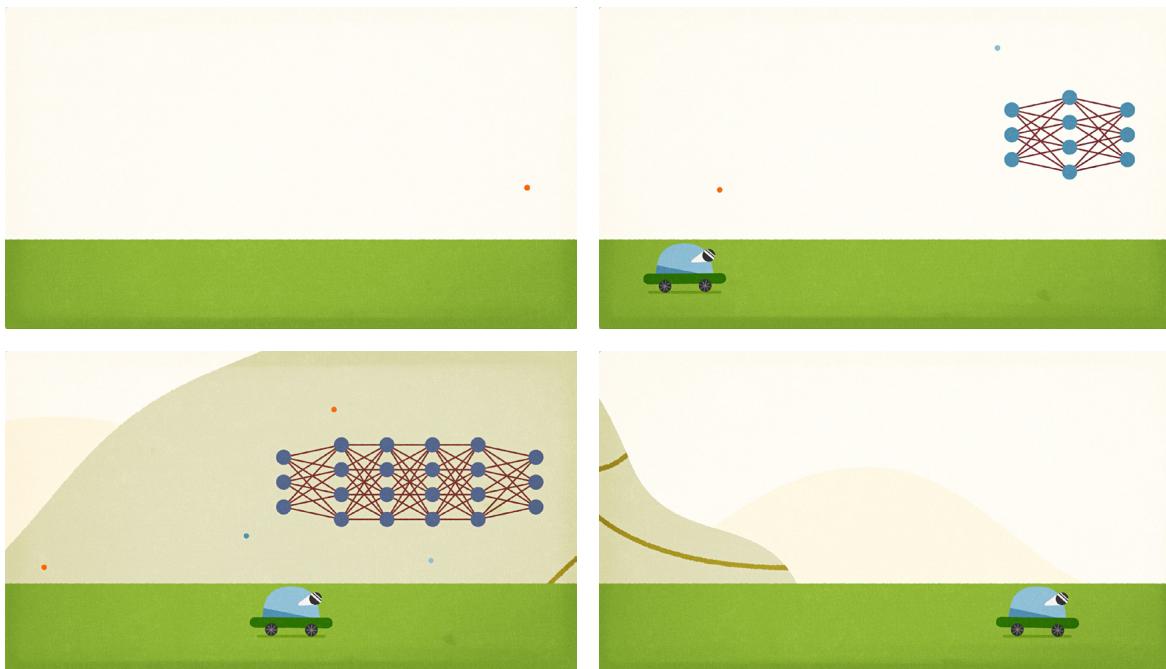
時代を超えて継承される建築物

ここでは、私たちと対象の距離を一気に飛躍させて、空間だけでなく時間をも超越する循環についてひとつ紹介したいと思います。そもそも、時間とはリニアに進行していくものなのでしょうか？昔の流行りやムードはデジャブのように繰り返されることがあります。そう、ひとつの時間軸の中で何かがはじまり、何かが終わるのではなく、まるでDNAのように、ものごとは螺旋状に進行していく。そう考えると、かつてあったものに対して単に「古臭い」とする見方は、あまりに一方的すぎるのかもしれません。

2020年12月に前橋にオープンし、建築業界のみならず広く話題となった白井屋ホテルは江戸時代に旅館として創業し、1970年代後半にホテル業に転向した後、2008年に廃業となった「白井屋旅館」のリニューアルプロジェクトによって生まれました。かつて芸術家や政府要人が多く訪れたという歴史を参照するように、内装を手がけたのは藤本壯介をはじめとする世界のクリエイターたちで、ロビーなどの共有空間や客室には杉本博司らのアートが飾られています。

リサイクルやリノベーションという手法自体は世界中で当たり前のものになっていますが、白井屋ホテルはその文化と魅力そのものを新しく生まれ変わらせています。その地に根付き、生態系を築き、芸術や思想を育んでゆく。それは、建築という大きな規模だからこそなしえる、文化、社会、生態系の循環。自分の半径5000mを見渡してみれば、あなたの町でもきっと時代を超えて生まれ変わった建築が見つけられるはずです。

100,000m



脳の情報循環がお手本、ディープラーニングの世界

PC やスマホや家電、そのほか私たちの生活のいたるところで実装されているAI（人工知能）。その根幹にあるのが「ディープラーニング」と呼ばれる機械学習の技術です。

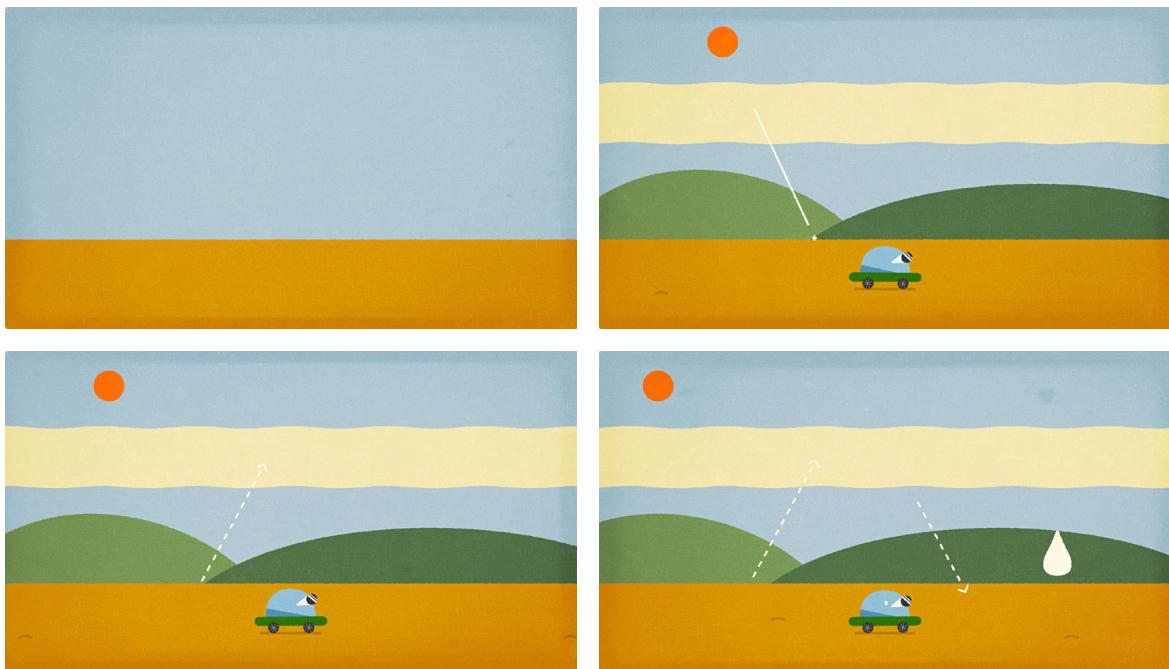
ディープラーニングの革新的な点は、膨大なデータを取り込むことで問題を解く方法を機械が自ら学習すること。これは深層学習とも呼ばれ、機械がデータから「学習」することによって、問題を解決することを可能にします。人間が知識や経験を身につけるのと同様に、機械が自ら学習していくのです。

そんな「ディープラーニングの父」と呼ばれているのが、日本神経回路学会初代会長・名誉会員の福島邦彦。1979年に発表された「ネオコグニトロン」というディープラーニングの基本構造はとても革新的なもので、現在開発が行われている音声、動画、自然言語といったさまざまな情報の学習を可能にする人工知能技術の礎となっています。

実はAIにおけるニューラルネットワークは、人間の脳が持つ神経ネットワークをヒントにして考案されたもの。人間の脳は、数百億個の神経細胞がお互いに連絡することでネットワークを形成しています。脳内で情報が循環するように、テクノロジーの発展により世界規模でネットワークが形成され、情報は巡り続けます。

ロボットと暮らす生活なんて物語の中だけの話だと思っていましたが、かつてSF映画に描かれた「近未来」を追い越す日は、もうすぐそこまで来ているのかもしれません。

10,000,000m



大気の循環

毎朝天気予報をチェックすることは「当たり前」になっていますが、その天気を予測する方法が見つけ出されたのは今からたった数十年前のこと。

1960年代後半に、気候を予測する手法「大気大循環モデル」を開発したのが、2021年にノーベル物理学賞を受賞した真鍋淑郎。真鍋は大気と海洋を結合した気候モデルを提唱し、大気中の二酸化炭素濃度の上昇が地球温暖化に影響を与えることを実証。高校の授業で習うような基礎的な法則を組み合わせて導き出されたそのモデルは、気候にまつわる研究に多くの影響を与えました。

地球温暖化が進み社会課題としての関心が高まる中で、真鍋は「大気大循環モデル」に水温、塩分濃度から海洋の状態を導く「海洋大循環モデル」を結合し、「大気海洋結合大循環モデル」を考案しました。過去の気象データを用いずとも現実の気候を高精度で再現できるという画期的なもの。そんな「大気海洋結合大循環モデル」は今も、気候変動の予測に用いられています。

2021年にノーベル賞という偉大な功績を授かることになる真鍋が大気モデルの研究をはじめたきっかけは「地球の気候を理解したかったため」なのだそう。地球温暖化防止のためではなく、知的好奇心に端を発した研究が巡り巡って、長年にわたって利用される気候モデルを生み出したのです。

200,000,000m



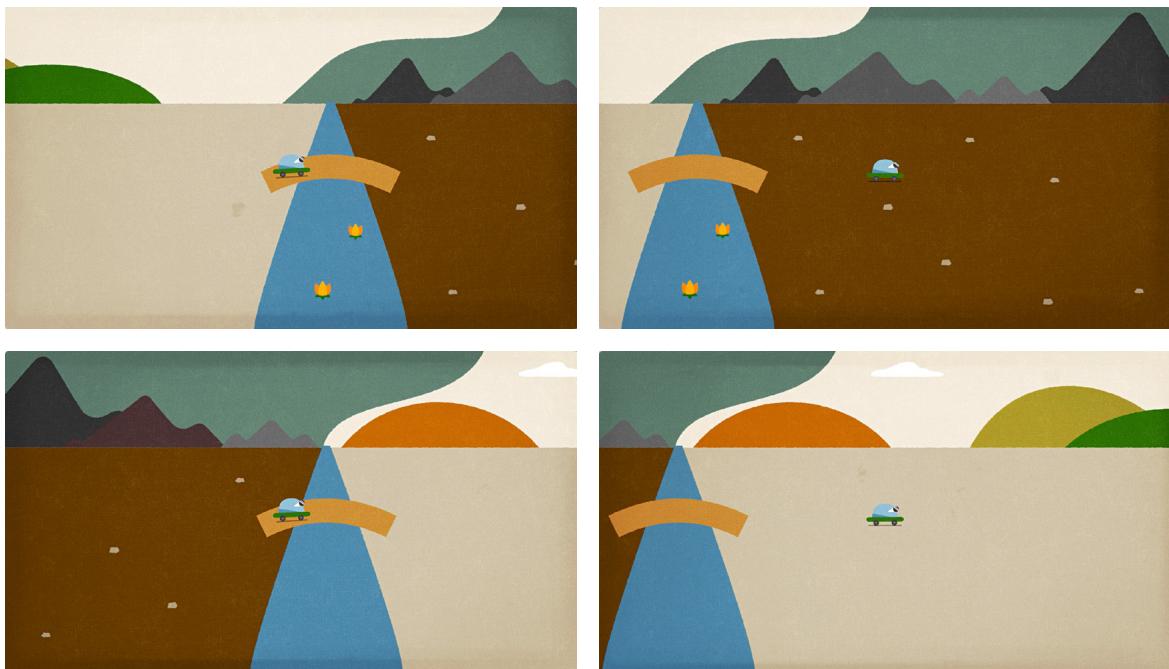
銀河やブラックホールは、未知なる循環によって成長する

さまざまな事象が循環によって成り立っているというのは、地球の話にとどまりません。宇宙空間を形成する銀河の構造もまた、物質の循環によって成り立っているということが近年の研究でわかってきました。

国立天文台の泉拓磨准教授は、2023年11月、130億光年以上離れた天体の放つ電波を捉えられるアルマ望遠鏡を用いて、地球から約1400万光年にあるコンパス座銀河の中心付近を高解像度で観測したと発表。分子や原子、プラズマを捉えることにより、銀河内のガスの流れや構造を詳しく調べることに世界で初めて成功しました。銀河を構成しているのは、宇宙空間内にある恒星や小さな星、ガス、宇宙塵やダークマター（暗黒物質）といった物質。ダストや有機物の素である元素が星の内部で作られ、それらが円盤銀河の内側や銀河と銀河の間を循環することで成長してきたと考えられています。

人類が宇宙空間へと踏み出したのはたった63年前のこと。しかし民間人の宇宙旅行を企画する企業が現れているように、宇宙までの距離は想像するよりもずいぶんと近いものになってきました。未だ解明されていないことはばかりですが、銀河そのものや、宇宙の成り立ちが解き明かされる日はそう遠くないのかもしれません。

...99,999,999,999,999,999 m



仏教思想における生と死の循環

仏教には成仏という言葉があります。人は亡くなったあと世界に溶け込み、ひろくあまねく広がり、混ざっていく。第125回芥川賞を受賞した玄侑宗久による中編小説『中陰の花』の中で、僧侶・則道の妻であり、日々の中で亡き者の影を感じ続ける圭子が、成仏についてこう語る場面が印象的です。

「恨みとか、悲しみとか、そんなものがほどけて大空に溶け込んでいって、私っていうようなものが無くなるくらいいちっちゃくなって広がって、みんな一緒に混ざっちゃうことやろ、成仏って……。純化することだと思うし、……純化に種類はないと思う。そりゃあ、なかなかほどけない人はいると思う。……とうとうほどけないっていう人もいるかもしれない。……でも、ほどけたら一緒やと思う」

「死ぬ」と「生きる」は真逆の概念であり、対義語であり、陰と陽である。実感として、それはそう。ただ、成仏の意味合いから捉え直してみると、「死」と「生」もひとつの循環の上にあると言えます。そしてそれは、自身からもっとも遠いようで、近いところで起こる循環なのです。



「循環」って、なんだろう? 10人のキーパーソンと考える



「循環」ってなんですか？ そう問われたら、あなたはどう答えますか？

身近なことから考えてみてもいいかもしれません。例えば、さっき古着屋さんで買った服。誰かに着られた、役割を終えた服は、わたしにとって必要な一着となり、そしてまた別の誰かのもとに手渡され、循環していく。または、もっともっと身近なことでも。体内を流れる血液は、心臓から押し出され、からだ中をめぐっています。はたまた、大きなスケールで考えてみると、地球の公転によって季節が移り変わり、毎年それを繰り返す、ということも循環と言えるでしょう。

日常的に耳にするけれど、意外と考えたことがない「循環」という言葉。デザイナー、生物学者、写真家、お笑い芸人……10人のこたえを標(しるべ)に、一緒に考えてみませんか。



株式会社BIOTA 代表取締役

伊藤光平

微生物は自然環境や私たちの体内、都市の中など、あらゆる場所に生息し、「さまざまな物質を分解して他の生物に栄養を循環させる」営みをしています。生態系における「分解者」というユニークな役割を担っているのです。

近年、さまざまな製品や素材のアップサイクルなど、人間社会の中のみで資源が移動することが循環だと捉えられがちですが、土に還るように捨てることで微生物に分解してもらい、他の生き物につながる循環を構築することが生態系を拡張するようなトリガーにもなりうるはずです。

本当の意味での「循環」とは、人間社会の中だけではなく地球に住む生き物全体を巻き込んだ物質の移動。

それは、人間が正しく循環させる「捨て方」のセンスともいえるものを獲得した際に訪れるのではないかでしょうか。

都市環境の微生物研究事業者。微生物多様性によって健康で持続可能な都市づくりを目指している。

HP : <https://biota.city/>



アートディレクター／グラフィックデザイナー

色部義昭

人間は誰もが循環の環(わ)の営みの中にいます。

しかし、自分がいる一部分は見えていても、その先に続く円全体を一人の人間が見通すことはとても難しいことです。

だからこそ今まででは、壊れたときや役目を終えたときのことを想像しないでつくられるものがほとんどだったのだと思います。

形あるものもないものも、連綿とつながり、循環の環を成している。その円一周を表現するのが日本館の意義だと思っています。

株式会社日本デザインセンター常務取締役、同社内にて色部デザイン研究所を主宰。主な仕事にOsaka MetroのCI、国立公園のVI、東京都現代美術館をはじめとする公共施設のサイン計画などがある。

HP : <https://irobe.ndc.co.jp/>



漫画家

魚豊

敬愛するニーチェの「永劫回帰」を、飲み込めずにいました。“輪廻転生”的なループは、決断や結末を先送りにする姿勢に至ってしまうのではないかと感じていたからです。

しかしあるとき、「環(わ)を循(めぐ)る」という行為は、円に対しベクトルを持つことであり、それは意志を持つことに等しく、つまり“始まり”を持つことだと気付いたのです。

周回することに円周は濃くなり、回帰する生活は、単なる虚しい反復を超える、ラディカルな肯定の意思となる。そしてそれは、“結末”から目を逸らすわけではなく、むしろ終わりを迎えてこそ完成し、その完成をもって、始められ、繰り返されるのです。

なぜその環が必要なのか。その繰り返しが、日常が、きっと自信になるからです。

東京都出身。2018年11月、「マガボケ」(講談社)にて『ひやくえむ。』で連載デビュー。2020年に『週刊ビッグコミックスピリッジ』(小学館)で『チ。—地球の運動について—』の連載を開始。『チ。』は「マンガ大賞2021」の第2位、「このマンガがすごい！2022 オトコ編」の第2位、「第26回手塚治虫文化賞」のマンガ大賞など、数々のマンガ賞を受賞。シリーズ累計発行部数は350万部を突破。2024年アニメスタート。現在、「マンガワン」(小学館)にて『ようこそ！FACT（東京S区第二支部）へ』を連載中。

X : @uotouoto



クリエイティブディレクター／バイヤー

金子恵治

なぜバイヤーという仕事をしているのか、改めて考えてみると、世界中を旅しながら日々にかを発見することが喜びだからだと思います。

古いものから新しいものまで、さまざまなものに出会い買い物付けてきましたが、それは服を通して歴史や情報などを世界中から集め、伝えていくということ。

ものを媒介するバイヤーという存在はある意味、循環的な存在と言えるかもしれません。

ファッションの世界では、トレンドは切っても切り離せないもの。ただ自分自身の根底には、タイムレスなものを選ぶという美学がずっと流れています。丁寧にリペアして使い続けたいと思うものや、また誰かに手渡したいと思うもの、そういう「朽ち果てるまで」使ってもらえるようなものに宿る普遍的な美しさを、ずっと探究していくのです。

L'ECHOPPE、J.B. ATTIRE、BOUTIQUEなどのクリエイティブディレクションを行う。

Instagram : @keijikaneko



現代アーティスト

小松美羽

いかなる能力で秀でようとも、互いに優劣をつけて命の重さを身勝手に測ろうとも、私たちの生命は等しく、宇宙を構築する一部だと思います。そして、大いなる宇宙も破壊と再生を繰り返す「循環」において、調和を保つための調律が常に行われているように感じます。私たちは無数で途方もないとさえ感じてしまう星々と無関係ではなく、インドの網のように繋がっているのではないかでしょうか。

生命の光のエネルギーの「循環」は、私たちに大調和をもたらします。そこに差別はなく、命が平等に審判される世界があるのだと感じます。

私たちが肉体を捨て魂の輝きだけが唯一となったとき、闇を照らす存在でありたいと強く願っています。そして多くの人々の魂が成長していくことを祈り、手を合わせるのです。

1984年、長野県生まれ。幼少期より自然豊かな環境で様々な生き物と触れ合い、その死を見届ける中で靈性に目覚める。生きとし生けるものが魂において平等であるという独自の死生観をもとに、神獣を主なモチーフとして作品を発表。日々の瞑想と深い祈りの果てに辿りついた境地から "The Great Harmonization" (大調和) という創作理念を提唱し、美術史に新たな1ページを刻む存在として期待を集めている。女子美術大学特別招聘教授、東京藝術大学 非常勤講師も務める。

HP : <https://miwa-komatsu.jp/>



©Allan Abani

デザイナー
大阪・関西万博日本館 総合プロデューサー／総合デザイナー

佐藤才オキ

デザイナーとして、アイデアを生み出すこと自分がひとつの「循環」だと思っています。

アイデアは天から突発的に降ってくるものではありません。日々、同じ服を着て、同じコースを散歩し、同じコーヒーと同じ場所で飲む。そうした単調なルーティンを通じて、日常の中の微差のようなものを発見し、そこからアイデアが生成されていく。

それは、異なる性質や周期の「循環」をそれぞれ個別に意識しながら、それらを柔らかく重ね合わせていく作業とも呼べるかもしれません。

1977年生まれ。2002年、デザインオフィスnendoを設立。国内外のデザイン賞を受賞し、主な作品は世界中の美術館に収蔵されている。クライアントは国内外多岐にわたる。現在は、フランス高速鉄道TGV新型車両のデザインを担当。

HP : <https://www.nendo.jp/>



お笑い芸人／ごみ清掃員

滝沢秀一

ごみを回収していると、簡単に買えるけれど捨てにくいものがあることに気付く。土、モバイルバッテリーなどのリチウムイオン電池……手にしているものがいつかはごみになるということを想像してみてほしい。どのように捨てるか、本当に必要かなどを考えれば、行動が変わる。

今まで人類が歩んできた歴史の中で「足りないから、欲しいから」が先立った結果、僕らと次の世代が苦しい状況に追い込まれている。

僕らの世代に課せられたことは、捨てるときを想像して行動すること。循環とは「出口」を考えることだ。

東京都出身。1998年、お笑いコンビ「マシンガンズ」結成。芸人の傍ら、ごみ清掃員としても働く。

2020年、環境省『サステナビリティ広報大使』に就任。

X : @takizawa0914



生物学者／大阪・関西万博シグネチャーパビリオン

「いのち動的平衡館」プロデューサー

福岡伸一

「動的平衡」とは、絶えず分解と合成を繰り返しつつ、秩序を再構築している生命のあり方であり、エントロピー増大の法則という宇宙の大原則に対して、生命が抗う唯一の方法です。

生命のミクロな単位である細胞レベルでは、細胞膜もタンパク質もDNAも常時、動的平衡の状態にあります。細胞が集合してできている私たちの個体も、摂食と排泄、異化と同化を行う動的平衡によって生命を維持します。生態系というマクロな視点から見ると、地球全体もまた大きな動的平衡の系であるといえます。そこでは炭素や水などの原子や分子、エネルギー、情報が絶えず離合集散を繰り返しながら循環しています。

生命現象は、その結節点としてこの循環を駆動しています。結節点が多ければ多いほど、循環のネットワークも強靭なものになります。

地球環境の動的平衡を支えるためにこそ生物の多様性が必要である所以もここにあります。

青山学院大学教授・米国ロックフェラー大学客員教授。『生物と無生物のあいだ』、『動的平衡』シリーズなど“生命とは何か”を動的平衡論から問い直した著作を数多く発表。

HP : <https://www.fukuokashinichi.com/>



写真家
吉田多麻希

目の前に横たわるのは、ほぼ骨と皮になり、かろうじて形を認識できる熊の死骸。腐った肉をほとんど食べ尽くした大量のウジガ、川のごとく、死骸からどこかへ移動しようとしている。夏のある日、海岸の岩陰で見た光景を、私は写真に撮った。

生きて、その地のものを摂取し、排泄し、死ぬ。その死をまた別の生が取り込み、排泄し、死ぬ。

延々と繰り返されてきた生と死のプロセスは、生態系が持続可能なバランスを保つための根本的なメカニズム。

現代日本において私たちの多くは、死ぬと焼かれ、墓に入る。自然界のサイクルから外れてしまっている。

人間の生活様式の変化がこの純粋な循環に与える影響は？自然の中で目の当たりにする光景は、いつも私にその問い合わせを投げかけてくる。

商業写真家としての活動と同時に、「人と生き物の関係性」をテーマに作家活動も行う。

Instagram : @tamakiyoshida_



コピーライター
渡辺潤平

決して抗うことのできない、そして乱してはならない、途方もなく強大で深遠な力のこと。

1977年、千葉県生まれ。博報堂を経て渡辺潤平社設立。日本館ではコンセプト立案とコピーワークを手がける。

HP : <http://www.watanabejunpei.jp>